ESD レンズ

政策および実践のためのリビュー・ツール

行動する ESD
教授とトレーニングのためのツール（2010 年）
ユネスコ教育セクター

聖心女子大学永田佳之研究室
（翻訳：吉田直子／監訳：永田佳之）
2013年 10月

この図書の著者は、本資料に含まれている事実の選択と提示ならびに、そこに著されている見解に対する責任を負うものであり、それらは必ずしもユネスコのものと一致するとは限らず、またユネスコに付託するものでもない。

本出版物に掲載の名称および資料の提示は、いかなる国・領土・都市もしくは地区、又はいかなる権限をもつ組織であれ、それらの法的地位に関すること、または境界線や国境の位置づけに関することについて、ユネスコの見解等を示すものではない。

国連教育科学文化機関（UNESCO）ESDセクション（ED/UNP/DESD）

7 Place de Fontenoy,75352 Paris 07 SP, France

電子メール: esddecade@unesco.org web: www.unesco.org/education/desd

行動するESD：教授とトレーニングのためのツールNo. 2 – 2010

カバー・デザイン: Helmut Langer Illustrations: Tammy Griffith

ED-2010/WS/33

注　釈[1]

国連持続可能な開発のための教育の 10 年(DESD)の事務局であるユネスコは、「ESD(持続発展教育)[2]レンズ」の作成に着手しました。これは、ESD の 4 つの主眼のひとつでもある、既存の教育プログラムの新たな方向づけに取り組む加盟国と関係者の支援を目的とするものです。ESD の広範性を鑑み、「ESD レンズ」では、学校段階における正規の教育システムの再構築に焦点を絞りました。

「ESD レンズ」は多くの協力によって作られました。RMIT 大学(オーストラリア)の John Fein 教授は、幅広い知識と概念の双方を構造的な仕組みになるように草稿に組み込むという難しい課題に取り組みました。その後草稿は、ユネスコ「ESD レンズ」・グループおよび DESD レファレンス・グループが内部で再検討し、コメントを付け加えました。South Bank 大学(イギリス)の Jenneth Parker 博士は、「ESD レンズ」の第二稿の作成に携わり、Rhodes 大学(南アフリカ)の Heila Lotz-Sisitka 教授は、ユネスコ・パリ本部の DESD 事務局に対し、「ESD レンズ」の編集と草稿を完成させるために学術的協力を行いました。DESD 事務局の前職員である Santosh Khatri は一連の作業の調整を行いました。

「ESD レンズ」の草案は、地域、そして国レベルでの視点を検討するため、ユネスコの 5 つの地域（アフリカ、アジア、ラテンアメリカおよびカリブ海）のうち、3 つの地域の国々で試験運用されました。そこで得られた知見は、草案を改訂するために使用されました。したがって、現行の「ESD レンズ」は、その目的通り、国レベルで発生する課題を盛り込んでおり、政策課題に焦点を絞ったものとなっています。

---

[1] この「注釈」は原文の翻訳であるが、本翻訳文書に記されている以下の脚注については、翻訳監修者による注記も含めており、その場合は（監訳者注記）と記すことにする。

[2] ここでは日本ユネスコ国内委員会によって使用されている「持続発展教育」と訳出してある。以後は、「ESD」もしくは「持続可能な開発のための教育」という訳語を当てることとする。（監訳者注記）

「ESD レンズ」の概要

出版の経緯

2009 年、持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議において、100 を超える国からの代表によって提出された「ボン宣言」[3]は次のように述べています。

20 世紀、かつてない経済成長が成し遂げられたにも関わらず、いまもなお非常に多くの人びと、とりわけ最も弱い立場の人びとが、根強い貧困や不平等の影響を受けている。絶え間なく紛争は続き、平和の文化を構築する必要性が叫ばれている。世界金融・経済危機によって、短期的利益に基づく持続不可能な経済開発モデルや実践にはリスクがあることが明らかになった。食糧危機および世界の飢餓は、ますます深刻な問題となっている。持続不可能な生産・消費パターンは生態系に影響を及ぼし続け、気候変動の例に見られる通り、現世代と未来の世代の選択肢や、地球上の生命の持続可能性を危ういものにしている。

21 世紀初頭のこの 10 年間、世界は大規模で複雑に関連しあった開発と、ライフスタイルにかかわる課題や問題に直面している。これらの課題は、持続不可能な社会を生み出した価値観に由来するものであり、相互に関連し合っている。ゆえに、これらの課題への解決には、よりいっそうの力強い政治的コミットメント、確固たる行動が求められる。そして、我々は、この状況を覆せるだけの知見、技術、技能を持ちえている。いまこそ我々は、よりよい行動と変革に向けてあらゆる好機を活用すべく、自らの潜在力を結集するべきである。[4]

「ESD レンズ」は、持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD、2005-2014 年）の実行を通じて、この課題に取り組もうとする国連加盟国を支援するために作成されました。「ESD レンズ」は、DESD のゴールを維持し、持続可能な開発へ向けた教育、とりわけ正規の教育システムの新たな方向づけを進めようとする加盟国の政策決定者や実践者を支援するものです。国連持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD）の全般的なゴールは、持続可能な開発に内在する知識、技術や価値を、国の教育計画のあらゆる側面に融合させることです。そのことは、すべての人にとってより公正で持続可能な社会を許容するライフスタイルや行動への変化を促すでしょう。このことは、すでに行われている EFA（「万人のための教育」）を補完するものであり、ミレニアム開発目標の目的を補強するものです。持続可能な開発のための教育とは、あらゆるところで教育の質と妥当性を改善する可能性を持つものなのです。

---

[3] Bonn Declaration (UNESCO, 2009). http://unesdoc.unesco.org/images/0018/001887/188799e.pdf.

[4] ESD-J（翻訳：三宅彩以、野口扶弥子、監訳：阿部治）による「ボン宣言」の仮訳。（監訳者注記）
http://www.esd-world-conference-2009.org/fileadmin/download/ESD2009_BonnDeclarationJapanese.pdf
（2013 年 9 月 15 日アクセス）（監訳者注記）

「DESD は、ESD の 10 年を実行するための手法を、各国の教育システムや戦略、そして必要に応じて国家の開発計画に盛り込むことを考慮に入れるよう、政府に求めます」。[5]この「ESD レンズ」は、この作業を始めるツールを提供するものです。「ESD レンズ」は、さまざまな教育の文脈や各国の政策や実践のニーズに適応させることができるでしょう。「ESD レンズ」は規範的なものではありませんが、ESD の観点を利用することで、教育政策や教育実践を再検討するためのガイドラインと出発点を提供します。「ESD レンズ」検討ツールは、立案、ESD に関する知識の構築、国策および教育の目的の見直し、学習成果の質の見直し、そしてカリキュラム、学習教材、評価および教師教育といったような、教育システムにおけるより個別的かつ具体的な側面を見直すためのものです。このツールは汎用性が高いため、異なるレベルでの教育システムで使用することができます。政策決定者にとってより適切なツールである一方、学校の教師や校長が利用できるツールでもあります。理想を言えば、ESD ツールは、国、州、地域あるいは地区の教育システムのより系統的な方向づけを確実にするために使用されることになるでしょう。「ESD レンズ」の試験運用[6]では、「ESD レンズ」が、国レベル、そして地域レベルで ESD を理解し、実践するための相乗効果を生む後押しとなっていることが示されました。

「ESD レンズ」が取り組む重要な課題は次のとおりです。

> 持続可能な開発にむけた学習経験の質を特徴づけ、また向上させるためには、教育政策、カリキュラムおよび他の支援のプロセスと ESD の理念とをどのようにうまく融合することができるのでしょうか。

「ESD レンズ」のメタファーとツールの使用

「ESD レンズ」のメタファー

ESD の「レンズ」というメタファーは、この文書の中では、教育を再検討するプロセスを実践するために使用します。レンズは「新しい目で再び見る」こと　ーこの場合は「持続可能な開発のための教育」の視点で見ることー　を促します。また物事をさまざまな側面から見ることを支援します。異なる方法で観察したり眺めたりする方法を提供する様々な種類のレンズがあります。例えば、眼鏡のレンズを考えてみてください。眼鏡のレンズは、モノをはっきりと見る、または離れて見るときに効力を発揮します。カメラのレンズは、“瞬間を捉えること”ができます。一方、顕微鏡のレンズは、細かいものを捉えるのに役に立ちます。

---

[5] United Nations General Assembly Resolution A/RES/57/254.
http://daccess-dds-ny.un.org/doc/UNDOC/GEN/N02/556/12/PDF/N0255612.pdf?OpenElement.
[6] The *ESD Lens* was pilot tested in three of the UNESCO regions – Africa, Asia and Latin America.

この文書において、持続可能な開発のための教育は、国の政策を再検討するための“レンズ”となります。ESD はまた、学習成果や実践を見直すためのレンズとしても用いることができます。そして文化は、私たちが何をどのように見るのかといったことを規定します。ですから、「ESD レンズ」がどのように展開されるのか、といったことも文化によって規定されることになります。

私たちは常に、異なるレンズを通して、異なる場所で異なるものを見るのと同様、ESD がどの国でも全く同じ方法で実践されることはないでしょう。各国が ESD をどのように解釈し、またどのように取り入れるのか、といったことに影響を与える要素はさまざまです。例えば、既存の哲学や学習理論は、ESD はどのように実践できるか、ということに影響を及ぼすでしょう。産業化、都市化、消費主義、生活の選択、利用可能な資源、そしてグローバル化といった、社会の変化に影響を与える支配的な思考パターンや要素が ESD の優先度に与える影響も場所によってさまざまでしょう。地域の文化や歴史、その地域固有の知識、またそれらとグローバルな知との関係性も ESD に影響を与えますし、ESD がどのように解釈され、実践されるかということとも無関係ではないでしょう。言語、そして教育制度内での言語の使用も、ESD に影響を及ぼす重要な要素となります。他にも、異なる文脈において ESD の発展に影響を与える多くの要因があります。ですから、提案したいのは、複数の関係者の集団が、それぞれの文脈における ESD の意味について、共通の理解をつくりあげることのできる地点にプロセスを置くことです。「ESD レンズ」におけるレビューのための質問、特に「ESD レンズ」レビューツール２は、その適切な出発点を提供するでしょう。

「ESD レンズ」: 概要

「ESD レンズ」は、持続可能な開発に向けた教育政策と教育実践を見直すためのツールの提供を主眼に置いています。「ESD レンズ」は、次に挙げる教育的な内容の領域に取り組むものです。

- 持続可能な開発への理解と、教育に対する示唆
- 国の開発政策、およびその開発政策と教育政策との関連性
- 教育の目的の見直しと、政策評価に関連づけられた示唆
- 学習成果の質に対して ESD がどのように貢献できるか
- 教授および学習の質の向上のために、ESD がどのように支援できるか
- カリキュラム立案、教授方法、教材や学習教材、評価、教師教育および学校経営を含む実践において、ESD はどのように実現され、また活用することができるか

一連の「レビューのための質問」を利用することで、「ESD レンズ」のレビュー・プロセスを構築することができます。これは、「ESD レンズ」が持つ参加型の原則と文脈化を促すことを意図したものです。「レビューのための質問」は、レビューツールと関係づけられており、ツールを利用する際の方針、助言や、意思決定や行動計画をたてるタイミングを提示してくれます。その内容は、評価のプロセスにかかわる複数の関係者を支援するようデザインされており、また、異なる段階での教育システム（例　国家レベル、学校レベル、学級での実践レベル）で行われている教育を評価できるよう設計されています。

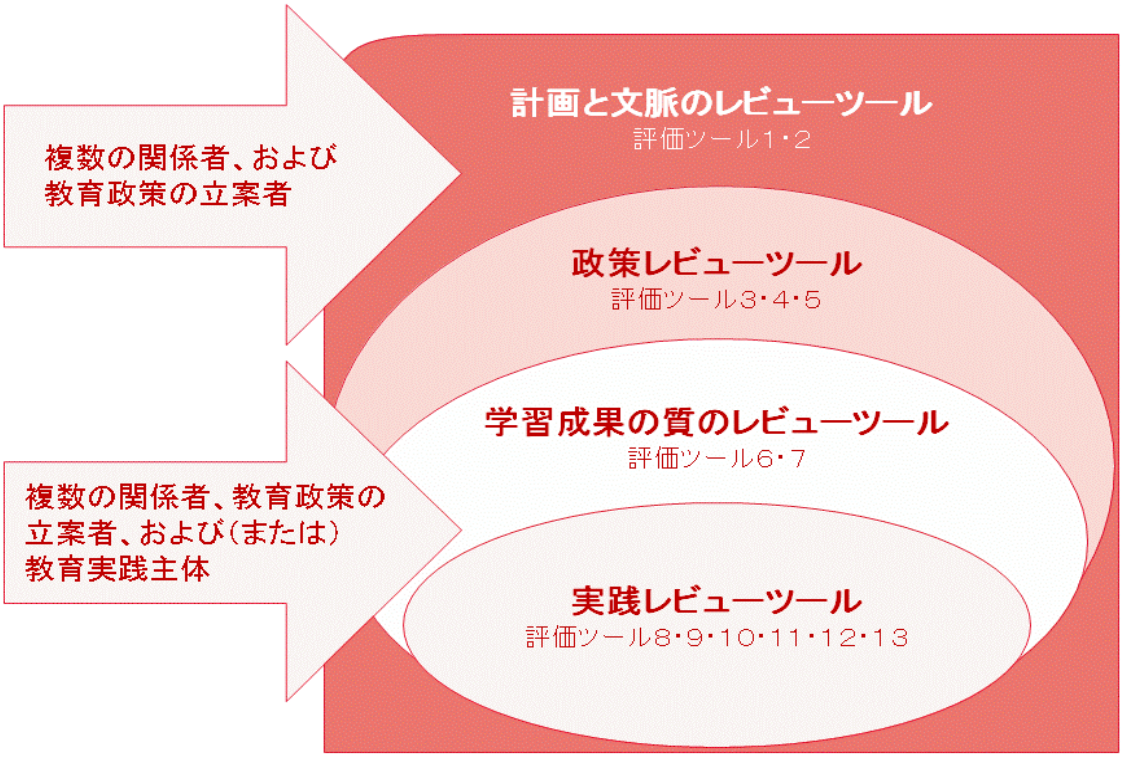
レビューのための質問とレビューツールは、優良な事例を広めたり、拡張するためのメリットや戦略を確認するための手助けになります。また、ESD の政策と実践の間のギャップや、潜在的な改善箇所を確認する手助けにもなります。「ESD レンズ」レビューツールを使用することで、ESD を通じて教育の改善のために何を行う必要があるのかが明らかになるはずです。「ESD レンズ」は、戦略的な設計を有する行動計画や、現在進行中の計画をモニタリングおよび評価するための提案を行いますが、ESD の行動計画については、「ESD レンズ」のレビューの過程で生じるいくつかの行動計画を取り込んだのち、このドキュメントの最後に提示します。

「ESD レンズ」レビューツール

「ESD レンズ」には、複数の種類のレビューツール（表 1 参照）が含まれており、教育計画の立案や実施のプロセスに関わるさまざまな関係者が利用できるものになっています。

- ○ 計画と文脈のレビューツール：相互理解の計画・構築と、ESD の文脈化を支援するために、2 つの調査ツールがあります（「ESD レンズ」レビューツール 1 および 2）。これらの導入ツールは、国または地域レベルで行われる ESD の実践に一貫性を持たせるために共に活動しようとする複数の分野のグループに有用です。
- ○ 政策レビューツール：国の教育や開発政策に反映される教育の目標や目的の再方向づけを支援するために、3 つのレビューツールがあります（「ESD レンズ」レビューツール 3、4 および 5）。これらのツールは、とりわけカリキュラム立案者、教育政策の立案者、あるいは国の ESD のコーディネーターらに有用なものとなるでしょう。
- ○ 学習成果の質のレビューツール：特に学習成果の質の検討に焦点を置いた 2 つのレビューツールがあります（「ESD レンズ」レビューツール 6 および 7）。これらのツールは、カリキュラム立案者、教育政策の立案者、および異なるレベルでの教育組織で働く教育実践者らに有用なものとなるでしょう。一方、学校の教師、学校経営者、カリキュラム・アドバイザー、教科書の執筆者および教師教育に携わる人々にも非常に役立ちます。
- ○ 実践レビューツール：教育的実践のさまざまな様相に注目する 6 つのレビューツールがあります（「ESD レンズ」レビューツール 8、9、10、11、12 および 13）。この中には、教授と学習の戦略や方法、カリキュラム開発、学習の評価、学習教材、持続可能な学校および教師教育が含まれています。これらのツールは国の政策決定者に有用ですが、教師、学校経営者、教師教育に携わる人々、教科書の執筆者、カリキュラム・アドバイザーおよび他の ESD の関係者（例えば NGO や大学など）にもとても有益です。

注: 「ESD レンズ」レビューツールの 2 と 6 は、ある特定の文脈において ESD が何を意味しうるのか、ということに関する理解を深めるには最も有効なツールです。この 2 つのツールは、国および（または）地域レベルでの、ESD の共通理解を構築するための助けとなります。したがって、「ESD レンズ」の利用者には、他のツールを使用する前に、これらの 2 つの「ESD レンズ」レビューツールから始めることをお勧めします。



図表１：　レビューツールと、レビューの過程で想定される広域な参加の枠組みとの関係性

「ESD レンズ」の潜在的な利用者

「ESD レンズ」の潜在的な利用者および受益者は、持続可能な開発のための教育の再方向づけに関与する組織や個人の実践者です。利用者には次のような人々が含まれます。

- 教育課や教育省およびそれらが管轄する教育機関（例えば学校、カレッジおよび大学）や、社会の持続可能な開発に対する責任を負っている他の省庁（例えば経産省、農水省、文化庁、環境省など）
- 持続可能な開発のための教育に関わるさまざまな人々によるフォーラムや委員会（多くの国々では、国の ESD コーディネーター組織がつくられている）
- ユネスコや、加盟国に助言や支援を行う他の国連機関
- 国際組織や開発庁のアドバイザーや、国の政策に関して政府と共に活動する人々のようなその他の開発パートナー
- 校長、教師、親、学生およびその他学校コミュニティのメンバー

「ESD レンズ」の利点

試験運用の過程では、「ESD レンズ」の複数の利点が確認されました。というのも、概して「ESD レンズ」は、ESD の進展だけでなく、国の発展や教育制度に対しても有用であることが分かったのです。
これらの利点のうちの 4 つは、コンサルテーションの至る所で何度も出現しました。

ESD についての議論を促進すること :「ESD レンズ」を使用した結果として生じる議論は、ESD に対する理解や機運の推進を後押しするものとなるでしょう。例えば、「レンズ」のメタファーは、その利点を享受する省庁、とりわけカリキュラム開発や教師教育（従事前・従事中の両方の場合を含む）に関わる省庁の間での、ESD に関する議論を促進します。さらに「ESD レンズ」は、教育者の間に、ESD の概念に関する議論を誘発します。この議論には、適切な教授法や学習法、そして知識と実践の間の隔たりといったことも含まれます。

部門を越えて関係者をつなぐこと :「ESD レンズ」は、国の教育システムをより包括的なものとして描こうとする可能性を持っています。それはマクロとミクロの水準をつなぐことでもあります。「ESD レンズ」は、異なる部門の関係者ら（関係省庁や教育者、開発パートナーなど）が ESD について協働し、またさらなる前進に向けて、教育の挑戦と戦略を確認しあう契機をもたらします。

持続可能な開発の視点による国の施策の見直しを支援すること :「ESD レンズ」は、国の開発計画の見直しに貢献し、貧困の削減やより持続可能な消費にむけた戦略を構築します。また、持続可能な開発に向けたホリスティックなアプローチに関する議論を促します。この議論には、文化の価値と役割や、環境保護の必要性に重きを置くことを含んでいます。さらに「ESD レンズ」は、すべての部門が持続可能な開発に向けた学習を取り入れられるよう、国の教育政策や教育戦略（そして部門を越えた関連政策）の見直しを支援することも可能です。

ESD による学習と成果を融合するための枠組みを提供すること :「ESD レンズ」は、持続可能な開発のための学習をいざなう思考の枠組みを提供します。また実践によっては、ESD の達成度を評価するパラメーターとして（すなわち、モニタリングや評価のためのツールを開発する際の基盤として）利用することもできます。「ESD レンズ」は、気候変動のような、我々に関連のある課題を、正規の学習、ノンフォーマルな学習、インフォーマルな学習へ融合するためのひとつの手段として機能します。そして、より個別的で、集合体としての行動を推進するための議論を後押しする一方で、教育の質と妥当性の向上に焦点化するための手段としても機能します。

モジュール１

「ESD レンズ」レビューの計画と準備

「ESD レンズ」レビュープロセスの計画と、本文書内での ESD の共通理解の構築

「ESD レンズ」レビューの計画

「ESD レンズ」を使用するためのシナリオ

「ESD レンズ」は、目的に応じて利用することができます（図表 2 を参照）。持続可能な開発に向けた将来的な見通しを立てるためにも使うことができますが、その際は、「ESD レンズ」レビューツールの 2 と 6 の「レビューのための質問」を使うとよいかもしれません。

「ESD レンズ」は、具体的なレビューや行動計画を立てる際にも有用です。特に「レビューのための質問」と他の「ESD レンズ」レビューツールは役に立つでしょう。下の図表 2 に示すように、これらは行動計画に向けて取り組むことに力点を置いているからです。

ESDレンズ使用に対するさまざまな目的	
フェーズ 1	フェーズ 2
SDやESDに対する意識づけや合意の形成	見直しと計画立案
目的: - SD やESDに関する議論を促進すること - 国家の文脈における、SDやESDの基本的概念を理解すること - ESDに関連した内容や教育学に関して、国と地域双方の文脈で精通すること	目的: - ESDに向けた展望を確立すること - 現在進行中の計画とリソースを確認すること - 受容可能性のずれとニーズを把握すること - 国、組織または個人レベルでの行動計画（今後に向けて）を策定すること.
レンズの使用；このフェーズでは、議論を促進することが最も重要なので、ESDレンズレビューツールを使わずにレビューのための質問をつくってみましょう。ただし、鍵概念に対する合意を得るために、カードやフリップチャート、議論のための覚書などを使うといいでしょう。 ESDレンズレビューツール2と6は、将来的な見通しを立てるさいに使用します。	レンズの使用；見直しと計画立案を行うには、より構造化された議論を行う必要がありますが、ESDレンズレビューツールを使うことで、議論の方向性を定め、現在進行中の計画を見直し、ずれを把握し、先へ進むためのステップを明確にすることができます。始める前には、誰がESDレンズレビューに関わるのかをはっきりさせておきましょう。

持続可能な開発へ向けた将来的な見通し

図表 2：「ESD レンズ」使用に対するさまざまな目的[7]

[7] 上記図中の‘SD’は「持続可能な開発」の英文略語（監訳者注記）

○ 方針：「ESD レンズ」は、持続可能な開発と ESD との連携を支援するために有用です。そうした連携は、省庁間の垣根を越え、ESD の調整役である国の機関の議論と非公式な議論の双方を通じて行われるものとなります。また、国の教育政策の見直す際にも役立つでしょう。

○ カリキュラム開発：「ESD レンズ」は、教育の質と妥当性に重要な影響を持つ立場にある者として ESD にかかわる学識経験者、カリキュラム開発者や教科書の執筆者が、議論を進め、ESD に対する意識を高めるために有用です。また「ESD レンズ」は、ESD のための学習教材や、既存の教授法や学習法を ESD に融合するための教授法的な手引きの開発を具体化するための情報提供や支援を行うことができます。

○ 高等教育／研究機関：ESD は研究課題を示したり、教育改革を促進したりするのに有用ですが、「ESD レンズ」は、そのような ESD の優先すべきテーマや課題を、高等教育機関や研究機関が特定するための指針を提供することもできます。「ESD レンズ」レビューのプロセスに高等教育が加わることで、調査のニーズとギャップを特定することができ、そのことで高等教育機関は、教育の文脈のなかで、文化、環境、社会と経済とを結びつけることができます。

○ 教師教育（現職教師）：実践を再検討するために役に立つ ESD レビューツールがあるので、学校レベルで ESD のレビューに参加する教師と学校長が、ワークショップを行うことができます。「ESD レンズ」の「レビューのための質問」やツールは、教師教育のプログラムの中でも使用することができます。教師たちが、現在行われている実践を、変容を考慮に入れた視点から省察するための一助となるためです。

○ 教師教育（教職課程在籍者）：教員養成機関は、国の立場からみた将来の教師に対するニーズを満たすことを目的に、「ESD レンズ」を取り入れることができます。講義の担当者や教職課程の在籍者は、持続可能な開発に関する問題に取り組むための学習目的の分析に「ESD レンズ」を使うことができます。教授のアプローチや教材を刷新するための議論や討論を促進することにもつながります。

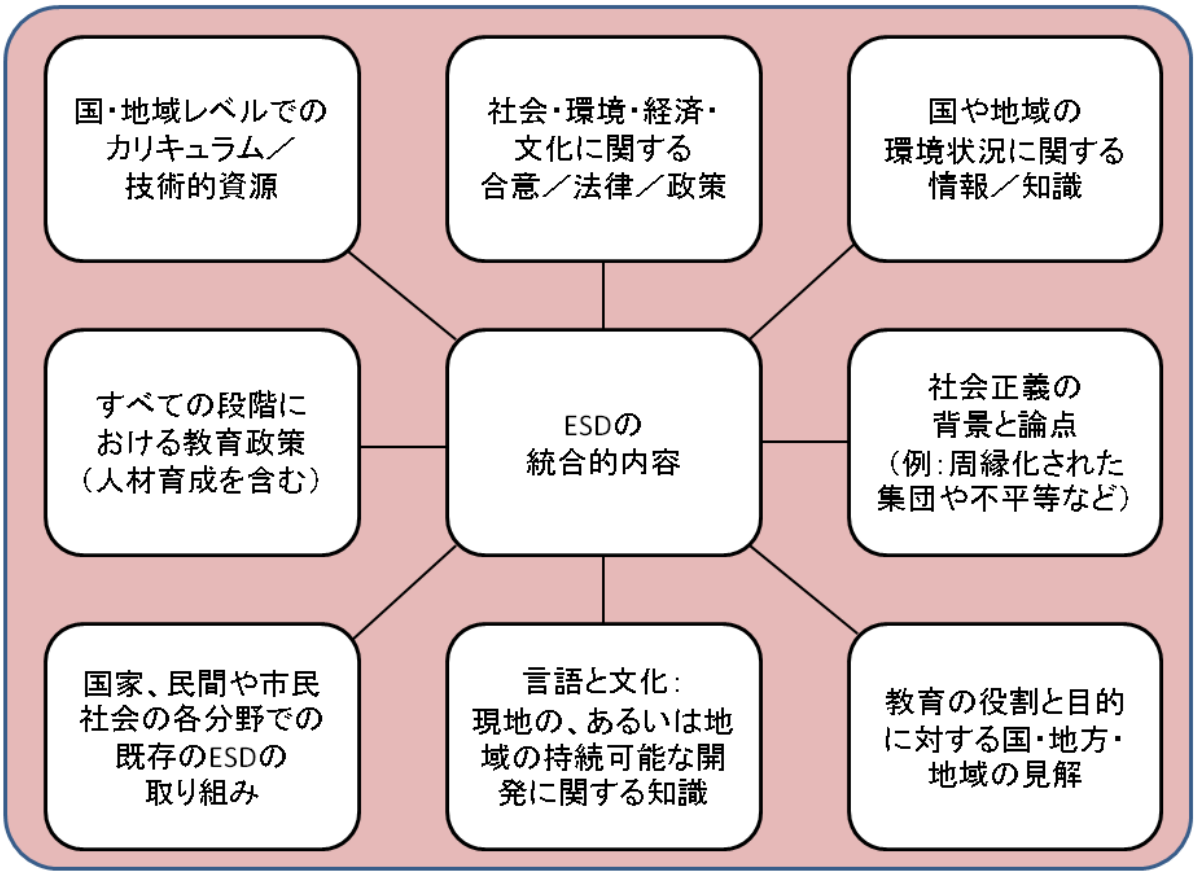
○ 学校：学校では、教師、生徒、学校長、保護者や、学校環境の評価や改良にかかわる地域の人々が参加する交流の場で「ESD レンズ」を利用することができます。ここでいう学校環境とは、ホールスクールアプローチを通して、持続可能な開発のための学習を推進する教授法や教材といったものも含まれます。

○ 地域（「ESD レンズ」においてノンフォーマル教育を担う場所）：「ESD レンズ」は、地域や学校の管理の指針として利用できます。そのことによって、持続可能な学校は、地域にとって学びの中心の場となることができます。また「ESD レンズ」は、学校と地域が話し合うための場づくりを支援します。教師や地域の団体、地方自治体、同じ行政区内の同僚との間や、若者、保護者たちとの間でのピアエデュケーションという方法のモデルを通じて、「ESD レンズ」を使用するためのプロセスを始めることができるからです。「ESD レンズ」はまた、成人教育プログラムの中で使うこともできます。

○ 学習者：「ESD レンズ」は、どのような年齢の学習者であっても、ピアエデュケーションの方法を通じて使用することができます。「ESD レンズ」は、持続可能な開発に対する理解を深め、地域の課題にどのように取り組むかという議論、とりわけ、持続可能な学校と学習のための健全な環境づくりに関する議論をはじめるための後押しとなります。

ESD のホールシステム的な視点と融合的内容

ESD はどんな人々ともかかわりがあります。どのようなライフステージにいる人にも、どのような文脈にもかかわりがあるのです。ESD は生涯を通じた学習に不可欠の部分であり、可能な限りあらゆる学習の場ーそれは正規の教育、ノンフォーマル教育やインフォーマル教育の場、また幼児期から成人期までの学習の場を含みますがーに関与しています。「ESD レンズ」は、教育に対するアプローチとして、ホールシステム・アプローチを基盤に置いているのですが、これは ESD を公教育のシステム、政策およびプログラムに位置付けているためです。ESD のホールシステム・アプローチは、教育の目的と持続可能な開発に向けての社会、経済、環境、文化といった幅広い領域の政策とを密接に結び付けるはたらきを持っています。ESD がどのように見なされ、またどのような文脈でどのように発展し、実践されるのか、といったことを形作る要因はさまざまですが（図表 3 参照）、これらすべての要因が ESD に影響を及ぼすため、この「ESD レンズ」は、政策や実践に至るプロセスに着目するアプローチの一環として、関係者間でのネットワークづくりや連携、人材の相互派遣や交流の促進につながるものとなります。



図表 3：ESD の融合的内容

「ESD レンズ」　レビューツール 1

「ESD レンズ」利用計画

このツールは、「ESD レンズ」を使って政策や実践の見直しに向けた計画をたてようとする際にいくつかの指針を提供します。

利用対象者：国の政策立案者や、ESD に関して指導的立場にある組織；複数の関係者によるフォーラムや、国の ESD コーディネーターによるフォーラムや委員会

利用時のヒント：指導的立場のある組織（文部科学省）は、「ESD レンズ」レビューを始めるために、小規模のタスクチームを招集したほうがよいでしょう。

論題	論題に対する解答	いつ、誰の、何が必要か
「ESD レンズ」の現状説明： この形態において「ESD レンズ」は利用可能か。「ESD レンズ」をより有用性のあるものにするための適応は必要か。		
「ESD レンズ」レビューの取り組みの限界： 既存のプログラムに対応し予算配分にかなったものか。		
ESD レビューの段階と過程： 最初に会議を行う必要性、可能性があるか。第一に再検討されるシステムの段階は何か。優先されうる ESD の分野は何か。それに派生するものは何か。その再検討のために必要な時間枠は。		
既存制度への融合： この「ESD レンズ」レビューに関連するかもしれない一連のレビュー会議はあるか。		
「ESD レンズ」レビューへの参加： ESD のレビュープロセスは国民の議論や参加を深めてきたか。関わるべき関係者やネットワークは何か。		
「ESD レンズ」レビュープロセス理解の共有と支援要請： 他国とのパートナーシップ構築は可能か。ESD レビュープロセスを支援しうる地域組織があるか。目的に合う実例は各地にあるか。		
研究能力： ESD レビューの情報と評価支援を提供できるだけの研究力はあるか。例：大学、または科学機関の参加		

モニタリングと評価プロセスへの貢献： 国ベースでの DESD モニタリングレポートに、レビューは貢献してきたか。また他調査システムと融合されうるものか。（例：万人のための教育レポート、国の持続可能な開発戦略レポート等）		
組織機関： 「ESD レンズ」レビュープロセスはいかに組織されるべきか。（つまり誰が先導者で、いかに他関係者の参加を促すか。）		

ESD への誘い

持続可能な開発

ESD の重要性を概説するにあたり、持続可能な開発の中の鍵となるいくつかを簡単に振り返る必要があります。ESD は、持続可能な開発に向けた、そして持続可能な開発についての学習のプロセスであり、それ自身が持続可能な開発に貢献します。

持続可能な開発という概念は、『我ら共通の未来（Our Common Future）』[8]の中で明示されました。この『我ら共通の未来』とは、「環境と開発のための世界委員会」で出された画期的な報告書（通称「ブルントラント報告」(1987)）のことですが、その中で持続可能な開発とは、「将来世代のニーズを損なうことなく現在の世代のニーズを満たす開発」[9]として定義されました。持続可能な開発の最終的な目標は、コミュニティの全ての成員、実際にはすべての国民や世界全体の人々にとっての生活の質を向上させることにあります。そのことが、人間と人間以外の生物を含むすべての生命が依存する生命維持装置の全体性を確保することになるのです。

1992 年の地球サミットでは、広範な内容を含むアジェンダ 21 が採択されました。アジェンダ 21 は、多くの重要な分野での合意や協定を生みだしました。また持続可能な社会に再方向づけするための、教育の役割を強調するため、「教育、意識啓発及び訓練の推進」の章が盛り込まれました。アジェンダ 21 の遂行が、ESD を含む多くの分野における発展の基盤を作ってきました。

その後の、2002 年にヨハネスブルグで開かれた持続可能な開発に関する世界サミットでは、持続可能な開発は、社会面や環境面での目的と、経済開発の面での目的とをバランスよく融合させることを含むものであることがさらに強調されました。そして持続可能な開発の 3 つの側面－社会・環境・経済－は、

---

8 「環境と開発に関する世界委員会」がまとめた報告書。邦題は『地球の未来を守るために』（福武書店、1987 年）（監訳者注記）

9 World Commission on Environment and Development (1987). *Our Common Future*, Oxford University Press, Oxford.

持続可能な開発の相互に関係しあう三本の柱として再確認されました。[10]
世界サミットでは、もう一つの重要な基本的側面として文化が取り上げられました。持続可能な開発に関する論点に強く影響を与える文化と結びついている価値観、多様性、知、言語、歴史、そして世界観が認識され、確認されたのです。文化はまた、ESD がどのように実践されるか、といったことにも影響を与えます。

「持続可能な開発」や「持続可能性」が含意するもの、あるいはその二つの関係性について、時おり混乱が見られます。ニュージーランド議会環境委員会（New Zealand Parliamentary Commission for theEnvironment）が出した ESD の報告書では、次のように説明されています。

> 持続可能性は、持続可能な開発の目標ですー人々の生活と環境の質を向上させるための、そして現在と将来の世代の人間が依存する生命維持システムを破壊することなく発展するための終わりのない探究なのです。公正さと正義といったその他の重要な概念と同じく、持続可能性は旅の目的地であり、また旅の行程としても見なすことができるのです。[11]

以下の原則は、ユネスコが提案した持続可能な開発の概念の例です。[12]これらは、持続可能な開発を志向する教育システムに含められる重要な概念です。

表 1：持続可能な開発の概念の例

相互依存性：人間は環境と不可分な存在です。私たちは個人や文化、社会や経済的活動と自然環境とを取り結ぶシステムの一部なのです。
多様性：地球という惑星と、地球上のすべての生き物は、非常に多様なものとして特徴づけられます。生物学的にも文化的にも、言語学的にも社会的にも、そして経済的にも多様なのです。私たちは、人生の質の多面性と健全な生態系それぞれの枠組みが持つ重要性と価値を理解する必要があります。
人権：すべての人は、思想、言論、集会の自由と法のもとで保護される、奪うことのできない人間の権利を持っています。義務教育、食べ物、人身保護、健康にアクセスする権利や機会の平等といった権利を行使できることも同様に人間の不可侵の権利です。
グローバルな公正と正義：「世代間の公正」と呼ばれます。これは、世界中のすべての人々が公正で良質の生活を享受できるよう、他者の権利やニーズが満たされることを重視します。
将来世代の権利：「世代内の公正」と呼ばれます。これは、我々が今日行う生活様式の選択は、将来世代が私たちと同じだけの選択の幅を持つことができるかどうか、ということに常に影響を及ぼすことを強

[10] United Nations (2002). *Johannesburg Declaration on Sustainable Development.*
[11] Parliamentary Commissioner for the Environment (2004). *See Change: Learning and Education for Sustainability*, New Zealand Government, Wellington p.14. Available at http://www.pce.parliament.nz/assets/Uploads/Reports/pdf/See_change_report.pdf.
[12] The source of these sample concepts is UNESCO (2002). *Education for Sustainability, From Rio to Johannesburg: Lessons Learnt from a Decade of Commitment*. Report presented at the World Summit for Sustainable Development, UNESCO, Paris.

調します。

保全：自然界は、人間が自分たちのニーズを満たすために開発することができる再生可能な資源や限りある資源を有しています。私たちは、自分たちの生活様式を選択するさいには、こうした資源の長期の持続可能性に関心を払う必要がありますし、資源の実用的な価値だけではなく本質的な価値のために自然を保護する必要があります。

経済的活力：経済成長は、動的な経済的活力の状態に依存します。そのような状態では、すべての人々が、持続可能な開発の枠組みの中で、生活の質が満たされるために必要な資源にアクセスするための機会と技術を有しています。

価値観と生活様式の選択：すべての人々にとっての持続可能な将来に貢献する生活様式の選択を保証するために、人間の幸福や経済的活力、環境の質への関心を反映する価値観が要求されます。

民主主義と市民参加：自分の生活に影響を与える決定に参加する権利、動機や技術を持つさいに、人々は他者や環境に対してより配慮しようとします。

予防原則：持続可能な開発の議論は複合的であるため、その科学的な提言はしばしば不完全で断片的になります。そのような不確実な状況では、意図せざる結果の可能性への配慮すともに、賢明な行動が要求されます。

持続可能な開発は、ミレニアム開発目標と強く結びついています。人間の幸福と生態系との間には強い関係性があるという認識はますます進んでいますが、環境面での持続可能性に注目するミレニアム開発目標は、まだ目標に達していませんし、社会は気候変動と生態系の破壊という二重の試練に直面しています。こうした試練は、貧困や HIV とエイズ、さらにはマラリアや妊産婦の健康リスク、ジェンダー差別や質の低い教育といったような、他の問題の影響を受けている国々ではより重大な問題です。深刻な世界の気候変動に関する数々の証拠は、エネルギーの持続可能な方式へのニーズを際立たせるとともに、生物多様性、気候、過剰消費、食糧安全、水不足や健康と、人間の幸福との関係性といった、その他の議論を提起してきましたが、持続可能な開発に挑戦するための総合的な思考と融合的なアプローチへの必要性は、それほど高まることはありませんでした。

国際的な会議の場では、持続可能性は望ましい目標として受け入れられてきたにも関わらず、世界では、環境と開発の関係性はいまだに別々のものとして認識されています。環境保全主義は、ひとつの特徴として保全ということを含んでいるので、人間が依存している生命システムの側面を、その本質的な価値を維持すべきとする側面とともに強調します。産業革命は、大規模な資源の搾取と、生命維持システムの劣化を引き起こす成長と開発のモデルを示したことで、保全の目標をこれまで以上に深刻なものにしました。同時に、人間開発の働きかけと社会正義の視点からは、貧しく周縁化された人々の生活の改善と、富裕層による消費の縮小が要求されます。過剰消費と公正な資源の共有を調和させることや、すべての人々に公平に基本的な人間開発のニーズを提供することと保全とを調和させること、環境保全と廃棄物管理が目指

すものは、持続可能な開発のカギとなる緊張関係にあります。こうした緊張関係は、世界中で異なるやり方で展開されています。基本的なニーズを提供する課題に直面している社会もあれば、過剰消費や過度の廃棄物の問題に直面している社会もあります。いくつかの国では、その両方の問題が同時に起こっている場合もあります。このような挑戦は、公平、公正、社会正義といった課題と、地域、国、世界レベルでの環境保全を軸にしています。

すべての人々が、経済的な思想や実践、あるいは文化変容について再び方向づけを行うことを必要としています。人々は教育の再方向づけについても求めているのですが、この中には、持続可能な開発のための教育が提供する教育も含んでいます。

持続可能な開発のための教育

「持続可能」に生きるということは、環境を破壊することなく、将来世代に問題を残したり、世界の他の地域に住む人々に問題を押しつけたりすることなく、すべての人々の生活の質を向上させるような開発のあり方を模索することを意味しています。何も行動しないことはそれなりの結果しか生まないこと、あらゆる社会レベルで変革と変化のための方法を見つけなければならないことを理解する必要があるのです。

ESD の役割とは、すべての社会の分野やレベルで、こうした概念とそれが持っている力を統合することなのです。

社会の中での教育の役割

教育は、国の開発目標を支援する上で主要な役割を果たしており、社会のニーズや願いに応える役割も担っています。ユネスコの 21 世紀教育国際委員会が出した報告書『学習：秘められた宝』[13]（ドロール・レポート, 1996）では、教育の目的は複数の緊張関係のバランスと融合をとることであるとの議論がなされました。

- グローバルと地域の緊張関係：教育は、若者が自分たちの国や地域での生活の中で積極的な役割を果たすことに加えて、世界市民となることを支援しなければなりません。
- 世界と個人の緊張関係：教育は、若者が未来を選択し、それぞれの文化の中で自分の可能性を十分に発揮するとともに、グローバリゼーションのリスクと将来性をどのように批判的に評価し、バランスをとるかを学べるよう支援しなければなりません。

[13] Delors, J. (Chairman) (1996). *Learning: The Treasure Within*, Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century, UNESCO, Paris. The *Highlights* to the report are available on-line at http://www.unesco.org/delors/delors_e.pdf.

○ 伝統と近代の緊張関係：教育は、若者が歴史と文化的な伝統を正しく理解し、評価することできるよう支援しなければなりません。それによって、変化と変革が必要であり、また価値があるとされる倫理的な判断力と共同する技術との調和がとれるようになるのです。

○ 長期的思考と短期的思考の緊張関係：教育は、若者が長期的な目標と短期的な目標のバランスのとり方について学ぶことを支援しなければなりません。多くの課題を解決するには、忍耐と将来世代のニーズを考慮に入れることが要求されるということを十分に認識してもらう必要があります。

○ 競争と協力の緊張関係：教育は、若者に、競争と協力と連帯の原則、すなわち報酬が得られる競争と、強さを与える協力、つながりあう連帯の原則のバランスをとる一方で、彼らが全力で努力することを支援する必要があります。

○ 精神的なものと物質的なものの緊張関係：教育は、若者が精神性と文化的な伝統と価値観に従って行動することを支援します。さらにますます物質的で消費に拍車がかかる社会対し、他者の幸せの多元性と配慮の観点から批判的かつ持続的に参加することを支援します。

○ 既存のカリキュラムと重要な新領域の知識の緊張関係：教育の目的は、最も優れた伝統的なカリキュラムの内容と、重要な新領域の学習、例えば自己認識や、身体的、心理的、社会的幸福を確保するための方法、自然環境やよりよい保護に関する理解を向上させるための方法といった学習との間のバランスをとるようにしなければなりません。

教育は、これらの緊張関係に応え、調整しなければなりません。だからこそ教育は、個人、地域、社会国家、そしてグローバルな開発の中心的な位置におかれる必要があるのです。その結果、すべての人々（学習者）が潜在能力を発揮することができ、また自分自身の生活や家族、友達や隣人（近くの隣人も遠くの隣人も）に対する配慮と責任を負うことができるようになります。ここで開発される能力とは、生産的で持続的な仕事に就くこと、社会的、文化的な貢献することや社会福祉、我々の生活スタイルの選択が自然界や他者に与える影響を最小限にすること、地域、国、グローバルな文脈の中で、見聞が広く積極的に行動する市民として他者に働きかけることを含みます。

ドロール・レポートでは、社会的、経済的な開発への別の通路を見つけることは、新しい世紀の「知的かつ政治的に重要な挑戦のひとつ」であると述べています。レポートは「このような大きな挑戦が、教育政策の決定に関心を払う原因にならないということがあるだろうか」と問います。そしてこう続けます。

> …すべての人々が、責任をもって教育の目的と手段の両方に関心を向ける必要があるのです。
> …持続可能な人間開発、人々の相互理解や民主主義の刷新に貢献することで、教育政策がよりよい世界の構築を支援できるような開発を行うために。

ドロール・レポートが書かれたのは、社会で新たな緊張関係が生じたときでした。とりわけ公正さや資源の利用と枯渇の問題、地域レベルとグローバルレベルでの消費と公害に関わる緊張関係や、無限の経済成長と持続可能な開発との間の緊張関係が挙げられます。持続可能な開発は、環境の持続可能性、経済の実行可能性、社会の重要性の原則の間で進められることが求められています。新たな緊張関係は、ドロール・レポートでは取り上げられませんでしたが、DESD の文脈の中、そして ESD の概念とプロセスの中で取

り扱われています（「ESD レンズ」レビューツール 6 参照）。

持続可能な開発のための教育の背景

ボン宣言[14]は、ユネスコ ESD 世界会合で出されたものですが、ESD を次のように定義づけています。

21 世紀における持続可能な開発のための教育

1. 持続可能な開発のための教育は、あらゆる人びとにかかわる教育および学習に、新しい方向性を提示している。ESD は、質ある教育を促進するものであり、あらゆる人びとを包括するものである。また、現在と未来の課題に効果的に対応するために必要な価値観、理念、および実践に基づくものである。

2. とりわけ、水、エネルギー、気候変動、災害とリスク軽減、生物多様性の喪失、食糧危機、健康危機、社会的脆弱性・不安定といった異なる優先事項や問題に、社会が取り組んで行く上で手助けとなるのが ESD である。また、新たな経済学的思考を構築する上で、ESD は極めて重要である。体系的・統合的アプローチを通して、ESD は、弾力性に富み、健全で持続可能な社会の構築に貢献する。ESD は、教育および訓練の仕組みに、新たな妥当性、質、意義、そして目的をもたらす。ESD は、公教育、ノンフォーマル、インフォーマル教育の文脈や、生涯学習のプロセスにある社会のあらゆるセクターを含有する。

3. ESD は正義、公正、寛容、充足性、責任という価値観に基づいている。「地球憲章」に明示されているように、ESD では、ジェンダーの公正、社会の連帯感、および貧困削減の推進、配慮、高潔さ、誠実さが重視されている。ESD は、持続可能な暮らし、民主主義、人間の幸福を支える理念によって裏打ちされている。環境保全と修復、天然資源の保全とその持続可能な利用、持続不可能な生産および消費パターンに対する取り組みや、公正で平和な社会づくりも、ESD を裏打ちする重要な理念である。

4. ESD では、不確実性への対処や複雑な課題の解決へとつながる、創造的で批判的なアプローチ、長期的思考、革新性やエンパワーメントを重要視している。ESD は、地域レベルからグローバルレベルにいたるまでの環境、経済、社会、文化的多様性の相互依存関係を強調し、過去、現在、そして未来といった点も考慮している。

5. 人びとの多様なニーズや現実の生活環境と関連づけながら、ESD は、新しいアイディアや技術と同様に、地域の文化に組み込まれている実践や知識に解決策を見出し、活用する技能を提供する。

[14] *Bonn Declaration* (UNESCO, 2009). http://unesdoc.unesco.org/images/0018/001887/188799e.pdf.

ESD の融合された要素

持続可能な開発は、固定化された技術的な概念ではなく、むしろ地球上の人間存在の将来に向けられた現在進行中の開発プログラムです。ですから、持続可能な開発のための教育とは学びの旅でもあり、継続的な改善や新しい思考へとひらかれています。持続可能な開発の実践は、知識やスキル、価値を融合し、特定の社会や文化、歴史の文脈の中に知識やスキル、実践を位置付けます。持続可能な開発の挑戦は、実際にはローカルであり、かつグローバルなものなので、持続可能な開発の実践を行うことは、ローカルな知の体系とグローバルな知の体系との融合を助け、ほかの場所、地球上の別の地域に住む人々から学ぶことを支援し、地域の課題や解決策に取り組む間の、学びのプロセスの中で生じる多文化間の対話を促進します。（分析や評価を目的とする）価値やスキルから、持続可能な開発の知識を「取り出す」ことは有用です。しかし持続可能な開発の実践や変化のための行動の文脈の中で、それらがどのように融合されているのかを知ることは、もっと有用なことです。

○　持続可能な開発に関する知識

持続可能性は多くの領域からの知識を必要とします。この領域横断性と、関連する領域間での横断性が、幼いころから専門的であることを奨励するフォーマルな教育文化に挑戦を迫るのです。持続可能性は、システム思考の必要性を強調しますが、システム思考もまた、複数の伝統的な文化体系の学習や、ナラティブかつ／またはテーマ的学習の中に存在するものです。持続可能な開発は、グローバルな環境、経済、社会システムが相互に関連しあった「全体像」を理解し、そしてその中に自分たち自身を位置付けることを生徒に求めます。非常に重要なのは、環境、経済、社会、文化の間に存在する関係性を理解する能力です。さらに持続可能な開発は、ローカルな知やグローバルな知の体系、過去と未来の知、そして新しい解決策を、現代の課題に結びつけることを求めます（「ESD レンズ」レビューツール 2 参照）。

○　持続可能な開発を支える価値

持続可能な開発のための教育は、非常に多様な文化と生活様式のなかにあって、すべての人々が、人類というもの、そして運命を共にするひとつの地球共同体に属していることを気づかせます。そうした認識は生命の持続性の倫理、これは平等の原則、自然に対する敬意、普遍的人権、経済的公正、そして平和の構築と、相互理解に基づくものですが、そのような倫理を承認する責任をもたらします。そのような倫理の表現のひとつが、地球憲章です。これは，共通の目的と価値の共有に関する、10 年に渡る世界規模の異文化間対話の成果です。地球憲章は、平和の原則、社会的正義、国際間の対話、持続可能な開発のための法、種々の国連での会合の結果や声明を踏まえたものであり、教育環境における検討材料と地域に適応するための一連の国際的な価値と態度を提供します。地球憲章は持続可能な開発を導く重要な倫理的枠組みとして、2003 年のユネスコ総会で承認されました。地球憲章では、ESD に対する価値ある教材を紹介しています。DESD は、教育の再方向づけが、教育システムが促進されるような価値に注意を向けるよう求めているということを明確に認めています（「ESD レンズ」レビューツール 2 参照）。

○　持続可能な開発を高める思考と意思決定のスキル

今日の子どもたちは、未来の意思決定者です。彼らが近い将来直面するであろう疑問や課題は、今日我々が直面しているものとは異なっているでしょう。ですから教育システムは、今起こっている変化に適応し、また持続可能性に向けた積極的な変容に必要な思考と意思決定のスキルを発達させる機会を提供するべきなのです。そのようにして子どもたちは、持続可能な開発の課題を探求する方法と、批判的かつ創造的に考えることを学ぶとともに、持続可能な開発の原理や概念、価値に対する既存の理解と新しい理解に照らし合わせて、どのように意見を持ち、それを擁護するかを学ぶことができるのです。子どもたちはまた、持続可能性に関する複雑な問題に対する創造的な解決策を発見し、意思決定と行動がもたらす将来的な結果に意識を向けるためのスキルを必要としています。これは、幅広い情報に基づく倫理的な意思決定を行うために求められるスキルを含んでいます。持続可能性のために重要であると考えられるスキルとは、調査力、オルタナティブな未来を心に描く力、計画力と行動力、そして評価する力です。（「ESD レンズ」レビューツール 2 参照）

見識の高いシチズンシップを促進するための知識、スキルと価値の融合
持続可能な開発は、あらゆるコミュニティ、組織、そしてより広いグローバルな関係性に変化をもたらします。そのため、ESD においてシチズンシップというトピックが重要になってくるのです。平和で持続可能なコミュニティで、積極的かつ見識の高いシチズンシップを開発することは、教育の重要な成果のひとつです（「ESD レンズ」レビューツール 6 参照）。シチズンシップ教育の成功のカギとなるための要点は、生徒らにかかわる疑問、関心事や問題から始めること、そして地域密着型のプロジェクトや、学校や地域に変化をもたらす持続可能な開発のための実践への参加を通して、行動力を発達させるための手助けとなるような構造的な学習経験を提供することです。事例としては、平和を構築するための活動を通じて地域社会の関係性を改善したり、再生運動によって環境破壊を軽減したりすることが挙げられます（他にも多くの事例があります）。

さらに、この小さくて複雑な惑星の持続可能性の全体像は、グローバル・シチズンシップの意識を持つことの必要性と、気候変動といった地球規模で重要な課題に取り組むためのグローバルな協力と交渉の必要性をもたらします。行動する力は、もう一つの世界のあり方を想定するための潜在的な可能性を描きだし、様々な考え方の根底にある価値と影響力を明らかにし、それらの中から意思決定を行うためのひとつの手段です。これには、積極的かつ見識の高いシチズンシップを必要とするような計画の立案、行動、その評価を行うためのスキルの開発が含まれています。

「ESD レンズ」　レビューツール 2

ESD の要素の融合

このレビューツールでは、持続可能な開発におけるさまざまな要素、すなわち社会、環境、経済、そして文化に関連すると思われる知識、価値観、そしてスキルに影響を与える ESD の融合された要素をいくつか紹介します。下図が示すように、この枠組みの意義は、これらの要素を分離することにあるのではなく、むしろ持続可能な開発のための実践を通して、これらの異なる要素がどのように融合されるか、ということにあります。しかし ESD のホリスティックな視点を発展させるためには、これらの要素を分けて考察することも重要です。

利用対象者：（複数の部門で）ESD を政策や実践に組み入れることに関心のある政府および／または地域の関係者。このレビューツールは、国家レベルまたは地域レベルで ESD に関する共通理解を構築するための手助けとなります。このツール内の「質問」は、ESD の異なる文脈における知識、スキルや価値観にとって最優先されるべきことを熟慮し、特定するために役立ちます。

利用時のヒント：使いやすさを考えるならば、持続可能な開発のそれぞれの側面（社会、環境、経済、文化）に重点的に取り組むワーキンググループを立ち上げるとよいでしょう。各ワーキンググループは、全体に対して報告を返しますが、それらの情報はメンバー全体で精緻化されることになります。

持続可能な開発の様相	ESD の知識（包括的でなく、直接的な意味での）	ESD の態度と価値（地球憲章より）	ESD のスキル（持続可能な開発の 4 側面に関連）
社会 **・グッドガバナンス** **・社会的差別** **・一体性** **・男女平等** **・コミュニティ構築** **・健康** **・HIV，AIDS と性と生殖に関する健康** **・人権** **・平和**	**社会と持続可能な開発に関する知識の範囲の特定と優先づけ** （例） ・社会のはたらきと変化 ・多様性と包括性 ・健康と幸せ ・紛争衝突、紛争解決、平和構築	**持続可能な開発に求められる社会的価値の特定と優先づけ** （例） ・ガバナンスにおける民主主義の規範、透明性、説明責任の強化 ・非差別化、包括、公正、社会的正義 ・意思決定への参加と司法制度の利用	**持続可能な開発に求められるスキルに関する知識と優先づけ** （例） **リテラシースキル、コミュニケーションスキル** ・持続可能な開発のための学びとコミュニケーションのツール（この主題の域を超えた）としての言語、数字の使用（読む、書く、聞く、話す、行動する、調べる、計算する、検証する等）

持続可能な開発の様相	ESD の知識（包括的でなく、直接的な意味での）	ESD の態度と価値（地球憲章より）	ESD のスキル（持続可能な開発の 4 側面に関連）
ディスカッションポイント **・あなたの立場から見て重要な他の社会問題とは何か** **・あなたの立場から見て持続可能な開発のために優先されるべき社会問題とは何か**	・地域社会とグローバル社会の複合的連関 ・ガバナンスの責任と倫理的枠組み ・人権と責任 **これらは ESD を通していかに開発されうるか？**	・ジェンダーやその他の公正さ、および包括性の承認 **これらは ESD を通していかに開発されうるか？**	**批判的、相関的な思考、分析** ・洞察的な読解、調査と理解 ・論理的で批判的な根拠に基づく情報の査定と分析のための情報収集と情報管理
環境 **・生物多様性** **・気候変動** **・森林伐採** **・砂漠化** **・エネルギー** **・自然資源の保護** **・きれいな水** **・自然災害** **・汚染** ディスカッションポイント **・あなたの立場から見て重要な他の環境問題とは何か** **・あなたの立場から見て持続可能な開発のために優先される環境問題は何か**	**環境と持続可能な開発に関する知識の範囲の特定と優先づけ** （例） ・環境問題と持続可能な代替物に関する知識 ・自然サイクルの知識（炭素のサイクルなど） ・生態系（と生態系サービス）の回復力と脆弱性 ・政策決定のためのローカル、グローバルレベルでの生態系の健全性に関する知識 ・人間開発の様式が環境保全システムに与える影響 ・生態系への被害予防、生物多様性の崩壊、汚染、その他諸リスクの予防 ・環境、社会、文化、経済の関係性と、それが生態系や生態系サービスに与える影響に関する知識 **これらは ESD を通していかに開発されうるか？**	**持続可能な開発に求められる環境価値の特定と優先づけ** （例） 生態系の健全性の保全と生物共同体への配慮 ・悪影響下にある生態系の回復に必要な倫理的行動 ・危害予防 ・予防原則 ・生物と生物共同体（人間、また人間でない生物）の尊重と配慮 ・未来の世代の尊重 **これらは ESD を通していかに開発されうるか？**	・実証や分析、その他の知識と、経験や直感との関連づけ ・問題や代替的選択肢についての創造的考察 ・システム、関係性、循環の観点での思考 ・未来的思考 **社会的スキル、自信、共感** ・自己、および他者との関係の中にある自己への理解と評価 ・責任と適応能力、起業家精神、変化への対応、説明責任といった社会的・職務的慣行 ・寛容さ、チームワーク、交渉力、リーダーシップ ・関心の相違や、紛争の創造的かつ平和的解決を評価し、尊重する能力

持続可能な開発の様相	ESD の知識（包括的でなく、直接的な意味での）	ESD の態度と価値（地球憲章より）	ESD のスキル（持続可能な開発の 4 側面に関連）
経済 **・大量消費** **・持続可能な消費** **・貧困と公正** **・地域発展** **・都市化** **・移住** ディスカッションポイント **・あなたの立場から見て重要な他の経済問題とは何か** **・自分の立場において持続可能な開発のために優先される経済問題は何か**	**経済と持続可能な開発に関する知識の範囲の特定と優先づけ** （例） ・有力な理論への転向と成長と発展のための実践 ・さまざまな経済モデル ・内面性と外面性 ・経済的不公正 ・有限な地球の持続的な発展可能性についての議論 ・大量消費の影響 ・貧困の影響 **これらは ESD を通していかに開発されうるか？**	**持続可能な開発に求められる経済的価値に関する知識と優先づけ** （例） ・倫理的、社会的、環境的責務としての貧困撲滅 ・富と資源のより公正な分配と共有 ・生産・消費パターンの中での地球の再生能力と人権、共同体の幸福の保全 **これらは ESD を通していかに開発されうるか？**	**責任ある科学技術の利用** ・学びと持続可能な開発への行動のために科学技術を使用するスキル ・責任ある科学技術の利用と経済、社会、環境とを関連づけるスキル ・適切かつ持続可能な科学技術の選択と利用のスキル ・持続可能な開発の原理と実践に関連する様々な科学技術の影響を評価するスキル ・自然生態系の限度内で取り組むためのスキル ・持続可能な開発のための新たな技術と評価を促す数字的スキルと科学的スキル ディスカッションポイント **・持続可能な開発の強化のために必要な他のスキルとは何か**
文化 **・文化遺産** **・文化価値** **・文化保護** **・文化再生** **・文化批評** **・先住民族の知識** **・宗教と信条体系** ディスカッションポイント **・あなたの立場から見て重要な他の文化問題とは何か** **・あなたの立場から見て持**	**持続可能な開発に関する文化的な知識の範囲の特定と優先づけ** （例） ・持続可能な開発に有意義かつ必要な既存の文化的論点、価値体系、遺産、信条等 ・持続可能な開発のローカル文化とグローバル文化の結び付き ・持続可能な開発に必要な文化保護、文化批評 **これらは ESD を通してい**	**持続可能な開発に求められる文化的価値の特定と優先づけ** （例） ・地球と全生物多様性の尊重 ・生命共同体への配慮 ・他者と他者の幸福への配慮 ・公正の原理と他者の尊重 ・人間の尊厳、身体的健康、精神的豊かさ ・寛容、非暴力、平和 **これらは ESD を通してい**	

続可能な開発のために優先される文化問題と価値は何か	かに開発されうるか？	かに開発されうるか？	

持続可能な開発の実践における、社会、環境、経済、文化に関する知識とスキル価値観の融合

ESD のプログラムの中で積極的かつ見識の高いシチズンシップを育むために、持続可能な開発の実践は上記の要素すべてをどのように融合させることができるのだろうか？

○ 地域／国家／グローバルのどのような課題と持続可能な開発の論点を融合する必要があるのか。既に存在している代替案とは何か、そしてそれらはどのように実践されることが可能なのか。

○ オルタナティブな実践や未来は何に向けて計画・想定され、実践されうるのか。

○ 持続可能な開発の実践を実行するためにどのような計画が必要とされるのか。

○ 持続可能な開発の実践と代替案の実行を振り返るためにどのようなモニタリングと評価のプロセスが実行されるべきか。

こうした疑問は、持続可能な開発のための文化、社会、環境と経済に関する知識やスキル、価値観の融合を支援する教育的プロセスを提供します。

あなたが置かれている文脈の中で優先順位が高い持続可能な開発の実践を特定してください。

モジュール 2

「ESD レンズ」を用いた政策の再検討

融合された政策としての ESD の再検討への取り組み

政策に対するレビュークエスチョンとレビューツール

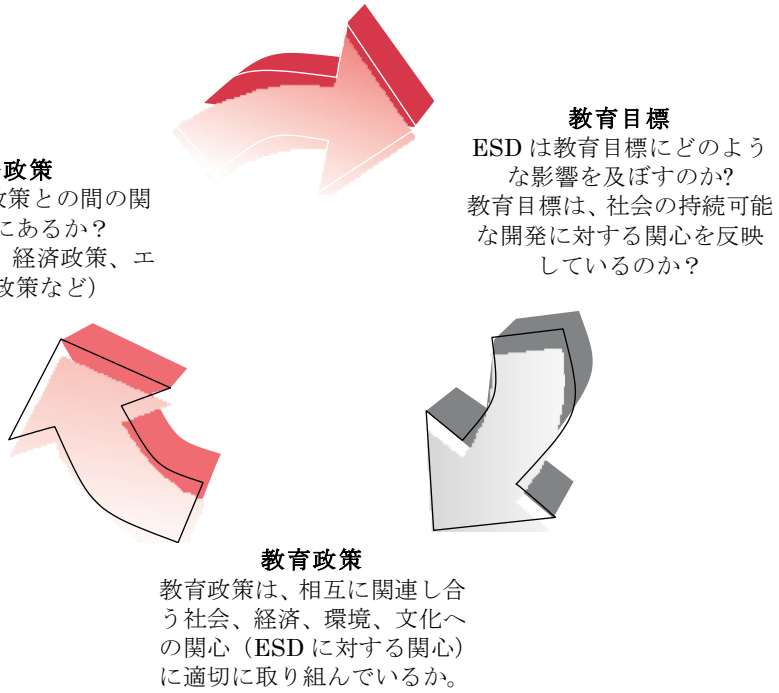
このセクションでは、次に述べるような政策に対するレビュークエスチョンを提示します。

○　レビュークエスチョン：開発政策と ESD を結びつけるものは何か？
○　レビュークエスチョン：　ESD はどのようにして教育目標に影響を及ぼすのか？
○　レビュークエスチョン：　ESD はどのようにして教育政策に影響を及ぼすのか？

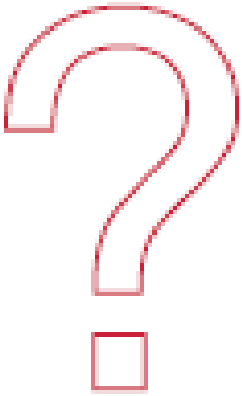
これらのレビュークエスチョンは、次のようなレビューツールによって支えられています。

○　「ESD レンズ」レビューツール 3：開発政策における ESD
○　「ESD レンズ」レビューツール 4：教育目標における ESD
○　「ESD レンズ」レビューツール 5：教育政策における ESD

このセクションでは、開発政策の目標と教育目標、そして教育政策との間でより大きな相乗効果を生み出すことに主眼を置いています。ESD を社会の中に完全に溶け込ませるためには、ESD の原理を開発政策と融合させたり、ESD の原理を取り入れるために現行の教育目標を変更したり、あるいは教育政策の一部分を変化させる必要があるかもしれない、ということを「ESD レンズ」レビューは示唆するでしょう。ESD が環境政策と適切に融合されることを保証するためには、この 3 つすべて観点で見ることが肝要になっていきます。下に挙げた政策の循環の模式（図表 4）は、環境政策の本質が相互に関係し合っていることを示しています。



図表 4：政策の“輪”



レビュークエスチョン：

開発政策と持続可能な開発のための教育を関連付けるものは何か

目的

国の開発政策においてどんな ESD の機会が存在するのか、またそのような開発政策が持続可能な開発の観点から見た教育の役割をどのように見ているのかを検討する。

このレビューに関与すべき人

国の教育政策や開発政策の立案者；開発政策のパートナー；教育や開発の関係者

方向性

一国のすべての人々の快適な暮らしを促進する際には、開発のプロセスはその国が所有している資源や資産に頼ることになります。例えば、ほとんどの途上国は開発を行うにあたって天然資源に依存しますが、先進国は人々の暮らしを支援する経済基盤や知識に基づく資源に頼る傾向があります。通常、開発政策は、将来の鍵とみなされるような資源に集中し、世界市場を調整要因として見なしています。今や開発政策は、持続可能な開発をますます考慮に入れ始めています。しかし非常に異なる水準で、です。国の開発政策に ESD の側面を組み入れることは、持続可能な開発を実現するために必要な道具と見通しを提供してくれます。教育および学習は、政策のデザインと遂行の両方を推し進めることのできるプロセスとしてみなされるべきなのです。教育および学習は、政策にフィードバックを提供するので、関係者とともに政策を検証し改善する手助けにもなります。持続可能な開発には、しばしば政策上では別々に取り扱われている部門を横断する統合的な政策が求められます。すなわち、持続可能な開発は組織的な変化をもたらすことで、人々に部門を越えた協働と、障害を越えた交流を要求するのです。資源の活用、人間開発と環境管理を含む政策に ESD の要素を加味することは、異なる政策部門の連携を創り出すことに寄与するのです。

レビュープロセス

「ESD レンズ」レビューツール 3 を読むことから始めましょう。下のリストに挙げた領域に対する現行の政策や戦略の写しを入手し、それに関連して、レビュープロセスにある領域群について重要な関心や知識を持つ人々を巻き込みましょう。レビューでは、国の政策によって相互に関連し合うさまざまな持続可能な開発の側面がどのように促進されており、あるいは促進されていないのかを特定し、そしてその関連性を特定すること（レビューツール 3 を利用）を参加者に求めましょう。そして政策における教育の役割と、どのような ESD の機会が存在するのかを特定するよう求めましょう。

このレビューに関連があると思われる領域は以下のとおりです。

- ○ 経済開発
- ○ 持続可能な開発
- ○ 貧困削減戦略
- ○ 保健
- ○ 文化
- ○ 人口
- ○ 環境
- ○ 地域開発
- ○ 教育
- ○ 雇用と訓練

いったん関連する政策が特定されたら、それらを序列化し、ESD の目標にとって最も重要となる項目を特定しましょう。地方やそれより小さな地域の政策もこのレビュープロセスに加えることが可能です。もしあまりにも多くの政策があるようであれば、まず ESD にとって最も重要である政策から取り組み、他のものは後で検討するか、より長い期間でのプロセスの中で検討するとよいでしょう。

意思決定の際には、ボン宣言が提示した ESD の定義を指針としましょう（前節の「持続可能な開発」の項目を参照）。あるいは、「ESD レンズ」レビューツール 2 で構築した行動計画を利用しましょう。そして ESD を開発政策に統合するために適切な政策資源を特定します。最も重要なのは、レビューの相互連関性です。

種々の領域での政策を再検討する作業は、特定の政策に対して関連知識を持つ異なるグループによって同時並行的に進められることでしょう。レビューをフリップチャートに落とし、順に壁に並べましょう。これにより、フィードバックが可能になり、政策における矛盾と葛藤を認識しやすくなりますが、そうしたことは新しい政策の開発あるいは政策変更にとって重要な場となります。また国の視点から見てどのような政策領域が最も効力があり、どのような領域が相対的に周縁となるのかを特定することも可能になるでしょう。例えば気候変動や生物多様性の喪失、貧困救済、国際的な人権擁護、食料不足といったような課題に国の政策が十分に応えているかどうかを確かめるために、グローバルな開発や課題との関連性の視点から国の政策の再検討を審問することもできます。

フォローアップの手続き

○ グループで結果を再検討する
○ 再検討をグループで行う場合は、生じている傾向や緊張関係、政策課題を議論するだけの時間をつくる
○ 政策変更と ESD に向けた新しい機会について議論する時間をつくる
○ いくつかの鍵となる結論や議論を進めるために検討すべき課題の一覧を作成する
○ ESD の課題が生じると思われる他の政策討論会について話し合う
○ ネットワークや専門家／関係者のリストなどの構築の可能性について話し合う
○ また、政策の首尾一貫性を保つために、国の持続可能な開発の優先度に基づいたより徹底的な政策の再検討を行う可能性について調査することを考慮にいれる

行動計画

このレビューの作業をさらに進めるために、2 つか 3 つの優先的なアクションプランを選びましょう。そしてそのアクションプランをこの『ESD レンズ』の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」　レビューツール 3

国の開発政策における ESD

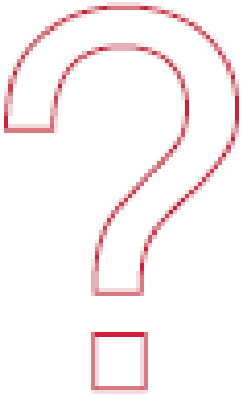
このツールは、国の開発政策に関連する教育の役割や、ESD の開発のためにどのような機会があるのかを把握することを目的に政策を再検討するさいに用いることができます。それらの政策の実施に対して既に誰が資源を割り当てているかを再検討することで、ESD を政策に統合するための具体的な機会が見込まれるかもしれません。

利用対象者：（複数の部門で）ESD を政策や実践に組み入れることに関心のある政府および／または地域の関係者。

利用時のヒント：国の開発計画には多くの優先項目がありますので、ESD にとってもっとも重要なものをひとつ選択しましょう。そして結果を比較し、アクションプランを決定する前に、再検討する政策に関わる専門家とともにワーキンググループを立ち上げ、政策の再検討の業務の分担をしましょう。

関連し合う持続可能な開発の局面	政策および／または戦略の名称	教育の役割	ESD の機会	手段
	この欄には持続可能な開発の諸局面に関わる全政策、戦略、計画と関係者を記入すること	この欄には教育に期待される役割についての様々な政策や計画、及び重要な関係者の主張内容を記入すること	この欄にはそれぞれの分析やディスカッションによって明らかになった対立点や、機会を記入すること	この欄にはこの政策声明を支えている手段、また必要な要素を記入すること
社会	例：保健、住居、社会サービスを含めた社会福祉と医療制度など	例：社会的結合における教育の役割；シチズンシップ；社会における対立の和解	例：移住や難民の理解などの世界市民としての観点	

関連し合う持続可能な開発の局面	政策および／または戦略の名称	教育の役割	ESD の機会	手段
環境(環境保全)	例：国家環境計画 環境保全、国立公園の重要な目標、重要な機関の役割なども含めて	例：水資源とエネルギーの保全、地域の生物多様性を促進する教育機関の必要性	例：気候変動の影響への適応・軽減や地域コミュニティの回復力を促進する国の取り組みに対する学校の貢献	
経済	例：経済戦略、雇用と訓練の目標、重要な産業と地域などの支援と発展を含む国の 5 カ年計画	例：地域コミュニティの活性化、大都市への移住制限のための地方産業就業を支援するためのスキルを開発する教育の役割	例：持続可能で社会的な事業のアイデアに対する教育開発賞	
文化	例：遺産、観光、メディア、芸術支援などを含めた国の文化政策	例：文化遺産に関する学習、文化活動への参加など、文化に関する予備的学習	例：自然と環境をたてる伝統文化、歌、文学 先行知識の研究	
インターリンクのレビュー	どの程度までこれらの側面は関連し合っているか。そこにどんな不安要素があるのか。部門間の政策上のさらなる相乗効果を構築するために求められることは何か。			相乗効果を確かなものにするために複数の資源を割り当てることができるか。



レビュークエスチョン：

持続可能な開発のための教育は、教育の目標にどのような影響を与えるのか？

目的

教育の目標に ESD はどのような影響を与えることができるのかを検討する。

このレビューに関与すべき人

国の教育政策や開発政策の立案者；開発政策のパートナー；教育や開発の関係者

方向性

教育の目標に関する国の声明は、しばしばより広範な政策の優先順位を反映することがあります。「ESD レンズ」レビューツール 3 が強調するように、ESD への焦点化を取り入れるために教育目標を再方向づけすることはまた、持続可能な開発のための政策をより広く支援する効果をもたらすことができます。

教育に対する ESD の目標の例を 2 つあげてみましょう。

- ○ 地域、国、グローバルレベルでの、社会、環境、経済そして文化という持続可能な開発の側面が相互に依存していることを理解し、評価すること
- ○ 持続可能な将来の達成を導くための態度やスキル、能力を開発すること

国の教育目標は、しばしば抽象的で一般的なものではありますが、社会の見通しや目的の設定に役立つということでは非常に重要です。社会を再方向づけする計画とは常に教育的側面を伴うため、社会が変化するためには新しい知識、価値観、態度、スキルや能力（「ESD レンズ」レビューツール 2 で検討したとおり）の開発を必要とします。社会や教育の変容においては、既存の伝統や知識をどのように基礎づけ、適応させるかということに加え、新しい知識や変化も考慮にいれることが常に重要になってきます。そうしたことはしばしば緊張をもたらし、複数性や多様性、そして知識が持つ力の結びつきを認識し、重んじることを求めます。

レビュープロセス

「ESD レンズ」レビューツール 2 では、経済・社会・環境・文化の結びつきを、ESD の中心を成す知識、価値観、態度やスキルに関連付けて考察しました。教育の目標の再検討するにあたっても、この枠組みと「ESD レンズ」レビューツール 2 の結果を利用しましょう。

国の教育目標に関する記述が含まれている文書のコピーを入手しましょう。違った角度から書かれている別の文書が複数あるかもしれませんし、政策は常に一貫しているわけではありません。異なる省庁やグループによって作成された文書は、教育目標についてそれぞれ別の側面を強調しているかもしれませんし、初等・中等・高等教育がそれぞれで妥当であるとみなす目標には著しい違いがある可能性があります。

レビューツール 4 で提案するプロセスは以下のとおりです。

- ○ 国の政策が明示されているのと同様、教育の第一目標を特定する。
- ○ その目標に向けた知識やスキル、価値観や態度に関する前提について分析する
- ○ ESD の知識やスキル、価値観（「ESD レンズ」レビューツール 2 を反映させることによって）を考慮に入れることによって、先ほどの前提がどのように変化し、あるいは改善するのかを考える
- ○ いったん分析を行ったら、ESD の知識やスキル、価値観（「ESD レンズ」レビューツール 2 を使った分析から）を盛り込みながら、その教育目標を書き替えてみる

フォローアップの手続き

- ○ （レビューツール 2 で特定された）文脈における ESD の優先順位を反映させた教育目標を再び公式化することを検討する
- ○ 教育目標が正式に変わるためにはどのようなプロセスが行われる必要があるのかを特定する。そのためにどのような計画が実行されるべきか。そのことがフォーマル教育を再検討するサイクルやシステムにどのように統合されるべきなのか。
- ○ 国の優先順位や国に影響を与える持続可能な開発の課題と関連づけながら、教育目標のより徹底的な再検討を行う

行動計画

このレビューの作業をより進めるために、優先順位の高いアクションプランを 2 つか 3 つ選びましょう。そしてそのアクションプランをこの『ESD レンズ』の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」レビューツール 4

ESD と教育の目標

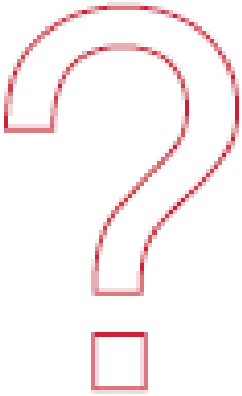
このレビューツールは、異なる段階での教育や訓練システムで表明されている国の教育目標に焦点を当てます。

利用対象者：（複数の部門で）ESD を政策や実践に組み入れることに関心のある政府および／または地域の関係者。

利用時のヒント：教育システムの中のあるひとつの特定の段階や部門（例：高等教育）でこのツールを使用するか、または教育システムにおける異なる段階や部門（例：義務教育、中等教育、高等教育、成人教育など）に分かれて作業グループをつくりましょう。必要に応じて人数を増やすとよいでしょう。

教育目標とその理由に関する国の見解（重要な部分のみ引用）	経済、社会、環境、文化を重視した持続可能な開発の側面	ESD の知識、価値観、態度、スキル（レビューツール 2 を参照）を重視した教育的特徴	ESD の既存の、または潜在的な側面：ESD はいかに強化されうるか	ESD の観点から見た場合の教育目標の読み替え
例 文部科学省： 21 世紀の全人類に向けた教育目標	例 認識されているが未定義の将来的視点	例 知識、価値観、態度、スキルーこれらのより明確な説明	例 21 世紀における生活の記述は、持続可能な開発と持続可能な開発のための教育の要素を包含しうる	例 生物と持続可能な未来への全人類のための教育目標
例 初等教育目標： 強固な生涯学習社会を基盤とした質の良い初等教育をすべての人々が享受できるようになる	例 未定義だが質の良い教育を重視した社会的公正の側面からの教育へのアクセス	例 質の良い教育はこれらすべての要素から成り立つものとして定義されうる	例 質の良い教育とは ESD との関わり（知識、スキル、価値観、そして積極的なシチズンシップと持続可能性への実践におけるこれらの融合）のなかで定義されうる	例 強固な生涯学習社会と積極的なシチズンシップを基盤とした質の良い初等教育をすべての人々が享受できるようになる

教育目標とその理由に関する国の見解（重要な部分のみ引用）	経済、社会、環境、文化を重視した持続可能な開発の側面	ESD の知識、価値観、態度、スキル（レビューツール 2 を参照）を重視した教育的特徴	ESD の既存の、または潜在的な側面：ESD はいかに強化されうるか	ESD の観点から見た場合の教育目標の読み替え
例 中等教育目標； 全ての学習者に就労生活への備えと、権利や義務への意識を持った責任ある市民になるための準備をさせる	例 経済だけではなく社会的なシチズンシップの側面を強調した職業教育目標	例 働くことに加えてシチズンシップ（権利と義務）の価値観と態度に対する知識を重視する	例 ESD におけるシチズンシップの環境面と社会面との関連性を詳しく説明する－グローバル・シチズンシップも同様に	例 全ての学習者に就労生活への備えと、権利や義務、そして持続可能な開発への意識を持った責任ある市民になるための準備をさせる
例 高等教育目標： 国の経済的、社会的幸福を促進させる	例 社会と経済に対する貢献	例 専門家にはこれら全ての要素を必要とする－社会に求められている貢献を果たすため	例 ESD における学習は、社会的、経済的な要素に加え環境保全をも含むべきである	例 生態系の健全性に配慮しながら国の経済的、社会的幸福を促進させる
その他、加える点				



レビュークエスチョン：

持続可能な開発のための教育は、国の教育政策にどのような影響を与えるのか？

目的

ESD はどのように統合され、教育政策のあらゆる側面にいかにして取り入れることが可能なのかを検討する。

このレビューに関与すべき人

国の教育政策や開発政策の立案者；開発政策のパートナー；教育や開発の関係者；教師、校長、学校レベルでのコミュニティ

方向性

教育政策、戦略、そして政策指針の文書は、教育の優先事項と方向性を指し示します。このような政策に ESD を取り込むためには、特定の政策、戦略や政策指針を再検討する必要があるかもしれません。それには、カリキュラム編成や教授・学習戦略、査定と評価、クラス内の学習教材、学校コミュニティの連携、そして専門的な教員養成に関する政策が含まれます。これらの政策は、生徒が現実の世界で使えるよう提供される知識や価値観、態度やスキルを通じて、学習システムの間接的な効果に影響を与えるように設計されていますし、学習システムに対して助言を提示しています（例：特定の文脈における教育や訓練のシステム）。国の教育政策に ESD を取り入れるためには、システムの観点からこれらを考える必要があります。そのため、ESD は政策の一側面ではなく、国の政策システムの至るところで取り扱われるものなのです。

レビュープロセス

- このレビューツールは単一の、あるいはより重要な教育政策に対して使用されるべきものです（例：カリキュラムに影響を与える重要な政策；学校経営や学校組織に影響を与える重要な政策；そして学習者の安全と幸福に影響を与える重要な政策）。

○　全体会議で報告をする前に、簡便化のため、評価者をグループに分け、それぞれが「ESD レンズ」レビューツール 5 で示した特定の側面の検討を行いましょう。

フォローアップの手続きと行動計画

○　どうすれば ESD を教育政策に取り入れることができるかを判断するためにこのレビューを使用しましょう。

○　鍵となる３つのアクションプランを決定しましょう。そしてそのアクションプランをこの『ESD レンズ』の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」レビューツール 5

国の教育政策における ESD

このレビューツールは、２つか３つの主要な国の教育政策に対して使用します（例：カリキュラム政策；学校経営政策；学習者の幸福に関する政策）。

利用対象者：（複数の部門で）ESD を政策や実践に組み入れることに関心のある政府および／または学校の校長や教師。

利用時のヒント：この作業はグループで行うことができます。グループは、それぞれ別の政策の検討を担当することになります。

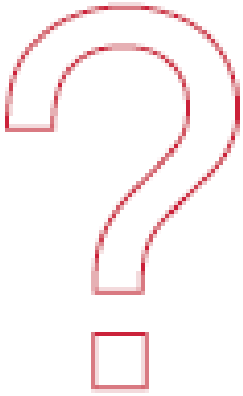
政策範囲（初等、中等、高等といった異なる教育の領域に適応させるため）	政策の名称	政策内容	学校への関連支援事業、手段	ESD を統合させるために誰が何をなし得るのか
	この欄には、左の欄で示した教育のさまざまな側面に対する助言を含む政策やカリキュラム文書の名称を記入する	この欄には、その文書が ESD について実際にどのように記述しているかを記入する。その内容は ESD に向けた体系的なアプローチを提言しているか(つまり文化・環境・社会・経済の各側面を含んでいるか)。	この欄には、これらの提言に取り組もうとする学校を支援するために有用となるさまざまな支援事業とリソースを記入する。	この欄には、さまざまな関係者、および ESD を普及させるために必要な事柄を記入する。
カリキュラム編成	例：国の教育計画	例 ESD の知識、スキル、価値観への体系的なアプローチを含んでいること	例 カリキュラム計画委員会 カリキュラムアドバイザー	例 ESD の実現に向けた体系的なアプローチのために、カリキュラムアドバイザーが学校にさらなる支援を行うことが必要
教授・学習戦略	例：国の教育計画			
教室での学習材料	例：国の教育計画			

政策範囲（初等、中等、高等といった異なる教育の領域に適応させるため）	政策の名称	政策内容	学校への関連支援事業、手段	ESD を広めるために誰が何をし得るのか
	この欄には、左の欄で示した教育のさまざまな側面に対する助言を含む政策やカリキュラム文書の名称を記入する	この欄には、その文書が ESD について実際にどのように記述しているかを記入する。その内容は ESD に向けた体系的なアプローチを提言しているか(つまり文化・環境・社会・経済の各側面を含んでいるか)。	この欄には、これらの提言に取り組もうとする学校を支援するために有用となるさまざまな支援事業とリソースを記入する。	この欄には、さまざまな関係者、および ESD を普及させるために必要な事柄を記入する。
査定と評価	例 査定と審査のガイドライン	例 ESD の問題が審査の中に組み込まれていることを確認	審査会 カリキュラムアドバイザー	例 ESD の側面を検討する方法に関する審査会と教師の研修を行う
学校コミュニティの関係	例 学校法			
教師の専門的養成	例 教員養成政策			
ゴミ、トイレ、エネルギー、水の管理を含めた校舎の設計・建築・運営	例 標準的な入札書類に記載された校舎の設計の要請	例 標準的な入札書類に記載された継続的に購入可能な保険約款を含むこと	例 学校経営委員会	例 持続可能な購買行動に関する助言を人々に提供するブックレット/情報源を作る
子どもの健康と幸せ(食糧を含む)	例 健康と栄養に関する学校のガイドライン	例 栄養価の高い地産の食糧の購入や、コミュニティサービスの供給を促進	例 学校ケータリングのスタッフ；コミュニティメンバー	子どもたちに健康的な食事を提供するケータリングスタッフ、またはコミュニティメンバーの育成
通学	例 学校法	例 より持続可能な交通手段を推奨		

モジュール 3

「ESD レンズ」を用いた質の高い学習成果の再検討

ESD と質の高い学習の成果の検証を引き受ける



レビュークエスチョン：

持続可能な開発のための教育は、質の高い学習成果をどのように高めることができるのか？

目的

ESD が質の高い学習の成果をもたらすためにどのような支援ができるかを検討します。
いま抱かれている質への関心に対して ESD がどのように関与することができるのかを検討します。

このレビューに関与すべき人

国の政策立案者、教師、カリキュラム開発者、調査官、教科書の執筆者、そして ESD に関心のある関係者

方向性

ボン宣言（ユネスコ, 2009）[15]は「教育は、持続可能な生活や、社会参加、適正な職業のための価値観、知識、スキル、および能力を育む「質ある教育」でなければならない」と述べています。

> 質は、広範な社会的・経済的変化が進行している世界に絶えず適応しなければならないダイナミックな概念となった。未来志向の考えや期待を奨励することの重要性は高まっている。質に対する古い見方はもはや十分とは言えない…さまざまな文脈があるにも関わらず、質の教育を追求する中では多くの共通要素が見出される。それらの要素は、女性・男性を問わずすべての人々が、彼ら自身のコミュニティの一員として参加できるようにし、また世界市民になれるよう支援すべきなのである。（ユネスコ, 2003）[16]

質の教育をめぐる世界規模の議論は、部分的には困難を抱えた生徒の成長に関する教育研究から始まっており、また、「万人のための教育」の最重要点を補完するものです。しかし質の議論は、急速に変化する世界において、現在、学習システムが将来への参画にどの程度備えているかというより幅広い関心からも生じています。

---

[15] *Bonn Declaration* (UNESCO, 2009). http://unesdoc.unesco.org/images/0018/001887/188799e.pdf.
[16] Ministerial Round Table on Quality Education, UNESCO, 2003, p.1.

このようにして富裕国と貧困国がともに非常に似通った課題に取り組んでいるのです。こうした関心にESD はどのように適合し、関係を持っているのでしょうか。

教育の質にかかわる鍵概念

- 豊かで健康的かつ持続可能な生活を送るために利用可能な知識、スキル、価値観、能力
- 読み書きの能力（科学的リテラシーを含む）、基本的な計算能力、生活のためのスキル、多様な知恵、そしてさまざまな文脈のなかでそれらを適用する能力の習得
- 適切かつ妥当な学習と、現在や未来への留保
- 知識を異なる文脈のなかで進展させ、移転させるための教育能力開発（例：小学生から中学生へ；学校から地域へ、など）
- 個人の潜在能力と社会的価値観の発達
- 家族やコミュニティ、より幅広い社会からの支援

「ESD レンズ」レビューツール 6 と 7 では、相互作用的な方法によって、ESD が質の教育の伝達をどのように行っているのかを検討します。教育の質の向上は、DESD（「ESD の 10 年」）と EFA（万人のための教育）の取り組みの主要な目的となっています。これは、以下の関係を示す質の教育の観点のひとつです。

> 質の教育は、個人としての学習者、家族や地域のメンバー、そして世界の一部分に関連する学びを反映しなければならない。質の教育は、過去を知り、現在に関わり、未来への展望を持つものである。質の教育は、単独で、かつ他者との関連で生きるかけがえのない個人による知の構築と、あらゆる形式の知の活用に関係している。質の教育は、文化や言語の動的な性質と、より幅広い文脈における個人の価値観、そして現代の公正を促進し、持続可能な未来を育むような生活の重要性を反映する。（Pigozzi, 2003:5）

質の教育は、特定のカリキュラムの内容だけではなく、応用力のような学習のより一般的な特徴に関わっていますが、ESD は、生活の全体に関わる知識、スキル、価値観や能力の開発を通じて、質の教育をもたらしうるひとつの方法です。『学習：秘められた宝』[17]では、教育の目的とは「学習の四本柱」を建てることであると提案しました。

- 知ることを学ぶ…情報や知恵に敬意を払い、追求するための知識、価値観、スキル
- 為すことを学ぶ…生産的な労働や娯楽に積極的に関与するための知識、価値観やスキル
- 共に生きることを学ぶ…国際間、異文化間またはコミュニティ内での協力や平和のための知識、価値観やスキル

[17] Delors, J. (Chairman) (1996). *Learning: The Treasure Within*, Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century, UNESCO Publishing, Paris. The *Highlights* to the report are available on-line at http://www.unesco.org/delors/delors_e.pdf.

○　人間として生きることを学ぶ[18]…個人や家族が幸せになるための知識、価値観やスキル

包括的な領域を持つ ESD ですが、態度や生活様式を変容させるためのスキルや能力を、個人や社会に身につけさせるという ESD の目的は、学習の五番目の柱として提案することができます。

○　自分自身と社会を変容させることを学ぶ[19]…持続可能な未来のための知識、価値観とスキル

これらの五本柱は、教育の基盤となります。五本柱は、生き抜くこと、すべての能力を発達すること、尊厳を持って生活や仕事を行うこと、開発実践に参加すること、生活の質を改善すること、決断すること、他者に対して共感を示し、社会的公正を実践すること、そして継続的な学習を行うことができる人々によって要請された必須の学習ツール（リテラシー、口頭表現、計算、問題解決など）および基本的な学習内容（知識、スキル、価値観、態度など）の両方を提供するものです。[20]

レビュープロセス

「ESD レンズ」レビューツール 6 は、上述した学習の五本柱を描いており、質の学習の成果を再検討するための興味深い方法を提示しています。また質の学習の成果のモニタリングと評価に際し、どんなことを含めればよいかといったことに対するいくつかの案も提示しています。こうした案は、ESD のモニタリングと評価のための具体的な戦略へとさらに発展していきます（「ESD レンズ」自体は、ESD のモニタリングと評価を行いませんが、「ESD レンズ」のレビューのプロセスやツールから、モニタリングの開発や、指標や焦点の評価の開発を知ることができます）。

「ESD レンズ」レビューツール 6 に続いて、教育的な文脈の中でいくつかの鍵となる質的な関心事項を考察するために「ESD レンズ」レビューツール 7 を利用しましょう。そして ESD がどのようにしてこれらの質的な関心事項に取り組むことができるかを検討しましょう。質の学習の成果をモニタリングし、評価するための追加的な指標を開発するためにこの活動を活用するのです。

この２つのレビューツールを使うことは、教育的な文脈における質の意味を明確にすることにもなるでしょう。ESD が質的な関心項目への取り組みに有用となる分野を優先させるために、これら２つのレビューを利用しましょう。

---

18 ここでは、ユネスコ「21 世紀教育国際委員会」編（天城勲訳）『学習：秘められた宝』（ぎょうせい）にならい「人間として生きることを学ぶ」と訳してあるが、「人間存在を深めるための学び」という解釈をもとにした訳出もある。例えば、コナイ・H・ターマン「存在を深める学び：オセアニアから見た ESD の視点」、日本ホリスティック教育協会編『持続可能な教育と文化：深化する環太平洋の ESD』（せせらぎ出版）所収）（監訳者注記）

19 UNESCO Bangkok.

20 These outcomes of education were listed in World Declaration on Education for All, Jomtien, 1990, Art. 1, para. 1.

フォローアップの手続き

○ いったんこのレビューを完成させたら、ESD が質の学習の成果に貢献しうることを保証するため何をすべきかを考察しましょう。例えば、どのような教師教育のプログラムが開発されるべきか、現行のモニタリングや評価ツールはどのように（レビューツール 2 で特定された）文脈における ESD の優先順位を反映させた教育目標を再び公式化することを検討します。

○ 教育目標が正式に変わるためには、どのようなプロセスが行われる必要があるのかを特定します。そのためにどのような計画が実行されるべきか。そのことが正規の教育を再検討するサイクルやシステムにどのように統合されるべきなのでしょうか。

○ 国の優先順位や国に影響を与える持続可能な開発の課題と関連づけながら、教育目標のより徹底的な再検討を行います。

行動計画

○ このレビューの作業をさらに進めるために、優先順位の高い２つか３つのアクションプランを決めましょう。そしてそのアクションプランをこの『ESD レンズ』の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」レビューツール 6

ESD と質の学習の成果

このレビューツールは、質の学習の成果について考察するためのひとつの方法として、ドロール・レポートによって提示された 21 世紀における教育の枠組みを利用します。その「五本柱」は別々のものとして見るのではなく、統合されたものとして見る必要があります。したがってこのレビューは、すべての柱を含むものとなります。

利用対象者：（複数の部門で）ESD を政策や実践に組み入れることに関心のある関係者、および／または学校の校長や教師。

学習の柱	ESD は質的な成果をいかにもたらすか	従来の学習成果の振り返り ESD の視点から見て差異があるか	質の学習の成果の到達度をモニタリングし、評価するための指標の開発
知ることを学ぶ	ESD はフォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルの教育を促進し；文脈を考慮しながら内容を明確にし；グローバルな問題と地域の重要な問題を含み；複数の領域にまたがるものである。 いかなる領域も ESD そのものではないが、しかしどの領域も ESD に貢献しうる。 レビュークエスチョン： こうした見解は、質の学習の成果をどのように高めることができるだろうか？	例： 従来の学習成果は、内容中心主義であり、内容とその文脈を学ぶことが重視されていない。	例： カリキュラムは内容と文脈の範囲のバランスを考慮に入れている。

学習の柱	ESD は質的な成果をいかにもたらすか	従来の学習成果の振り返り ESD の視点から見て差異があるか	質の学習の成果の到達度をモニタリングし、評価するための指標の開発
為すことを学ぶ	ESD は地域のニーズ、認識、条件に基づくものであるが、地域のニーズを満たすことが世界的な効果や影響をもたらすことがあるというのも事実である。そして、心的モデルや概念を精査・検証することを通じて、これまでの心的なモデルから持続可能性に向けた実践への転換を促す。また ESD は、企業家精神と創造的な開発の側面も含む。 レビュークエスチョン： 地域のニーズ、認識、条件に基づく持続可能性に向けた実践と学習体験への参加はどのように学習成果の中に表れるか。	例： 従来の学習成果は、学習者の持続可能性に向けた実践への参加を促すものではなく、知識の獲得のみを目指すものである。	例： カリキュラムはローカル、グローバルな知識に基づき、学習者の地域の持続可能性の実践への参加を含む。
共に生きることを学ぶ	ESD は、世代間・世代内の公正、社会的公正、公平な資源配分、他者間の地域社会への参加（など）の原則に基づいており、それらは持続可能な開発を基盤としている。 レビュークエスチョン： これらの諸原則はいかにして質の学習の成果を高めることができるか。	例： 従来の学習成果は、世代間・世代内の公正を考慮に入れていない。 例： 従来の学習成果は地域社会への参加を促すものではない。	例： カリキュラムは世代間、世代内の公正を含んでいる。 例： カリキュラムは地域社会への参加機会を含んでいる。

学習の柱	ESD は質的な成果をいかにもたらすか	従来の学習成果の振り返り ESD の視点から見て差異があるか	質の学習の成果の到達度をモニタリングし、評価するための指標の開発
人間として生きることを学ぶ	ESD は生涯学習を促し；持続可能性の概念の発展性に適応する。ESD は学びの価値の重要性を強調する レビュークエスチョン： 学習することを学ぶ（つまり生涯学習のスキル）ことや、持続可能性への理解を継続的に修正していく能力は、いかにして学習成果に表れるか。	例： これまでの学習成果は、現在進行中である持続可能性の変化を考慮に入れていない。－持続可能な開発が“固定的なもの”として捉えられている。	例： カリキュラムは、学習者に様々な背景を持つ持続可能性に対する彼らの理解を振り返るための機会を含んでいる。
自分自身や社会を変容することを学ぶ	ESD は地域社会が母体となった意思決定、社会的寛容、環境管理、柔軟な労働力、質の高い生活のための市民の能力を育成する；ESD は参加や常に省みる方法を通して促進される。 レビュークエスチョン： これらの取り組みはいかにして学習成果に組み込むことができるか。	例： これまでの学習成果は常に省みる方法が含まれていない。	例： カリキュラムは省察のためのスキルを発達させるための機会を含んでいる。
	ディスカッション・ポイント： 質の学習の成果の再考がカリキュラム・サイクルの再考に組み込まれていることを確認するためにいかなる手段がとられるべきか。誰が関わるべきか。モニタリングと評価ための指標は、いかにしてその他の「一般的な」モニタリングや評価のプログラムに統合することができるか。		

注：このレビューツールは、個々の案件に適用されるものでありそれらの案件が ESD の視点からみた場合に、どの程度質の学習の成果を促進させているかを検討するために利用することができます。

「ESD レンズ」レビューツール 7

ESD と教育の質

このレビューツールは、「ESD レンズ」レビューツール 6 における振り返りのプロセスを利用したものであり、教育において鍵となるいくつかの質的な関心に取り組むために ESD にどのような貢献ができるかを考察するものです。

利用対象者：（複数の部門で）ESD を政策や実践に組み入れることに関心のある政府および／または地方の関係者、および／または学校の校長や教師

鍵となる質的な関心	問題域の詳細	問題解決への ESD の貢献可能性
良質かつ健康的で、持続可能な生活のために有用な知識、スキル、価値、能力	例： 学校での学びは職場に還元されないという雇用者を対象にした調査がある；家庭は初等教育の日常生活への貢献度を考慮しない；教育制度は大量消費を助長している。	例： ビジネスの持続可能性とカリキュラムを関連させ、ESD の計画立案を企業関係者と連携して行う；持続可能な生活とその機会についての地域の関連情報を提供する初等教育の試験的導入；消費の削減に関する学習プログラムの紹介。
読み書き能力（科学的リテラシーも含めた）、計算能力、生活スキルの習得、多様な背景で適応するための多岐にわたる認識能力と才能	例： 読み書きや計算のテストにおける低いスコア；多数の市民が自身の書類を作成できない；科学的なリテラシーの能力が旧態依然である。	例： 読み書き、計算の指導と、地域における実際の生活での持続可能性の問題の関連性；ESD とシティズンシップカリキュラムの一部として読み書き能力を含める；複雑性をもつ科学のカリキュラムの紹介。
現在と未来に向けた学びと適正能力の妥当性と関連性	例： 生徒は自分の適性能力がメディアを通して聞くような未来の課題への準備であると捉えていない；集約的な学びとその分配は、生徒たちのライフスタイルと責任にかみ合わない。	例 生徒をカリキュラムと分配の話し合いに参加させること；地域の持続可能性の再考を、未来の問題と、そして／または雇用とビジネスに関わる機会を理解する学びの一部として提示すること；多様な商取引や職業の未来のための持続可能性の必要条件を提供する。

鍵となる質的な関心	問題域の詳細	問題解決への ESD の貢献可能性
発展的教育と、多様な背景で知識を応用する教育の中での能力育成（例.小学校から中学校へ、学校から地域社会へ、など）	例： 最近初等教育に入ってきた生徒に対する教師育成に対する支援が得られない。 学校での知的活動は範囲が狭いため、様々な場面に応用できない。	例： 従来のインフラを使用し、未来の課題に向けた市民教育に取り組み、持続可能な暮らしの方法を開発するような、低コストで ESD を基盤とするコミュニティカレッジをつくるために地域の NGO と組む;経験的知識の応用を促すような問題解決のための指導を実践する。
個人の潜在能力と社会価値の開発	例： 学問の枠組みにおいて排他的に取り扱われ、個人・社会の発展と、多様な個人の目標達成を考慮しない教育の成果。教育成果はつねに個人化される。	例 持続可能な開発において万人の参加が重要な役割である ESD のシチズンシップ精神との連携。
家庭、地域学習、より広い社会からの支援	例： 学校教育は保護者と地域社会の意見を考慮していない；学校教育は地域固有の知恵を弱体化させ、世代間に障壁を生み出すものであると捉えられる。新しい知識の共有や学校での研究結果に無関心な社会。	例： カリキュラムの中に地域や家庭の意見を取り入れるための創造的な方法論に取り組む NGO、市民社会の関係者が関与する委員会の設立。 学校に携わり、最新の技術開発を共有する科学者を支援するようなプログラムの開発。
それぞれの背景に特化した質的な関心ごと		

モジュール 4

「ESD レンズ」を用いた実践の再検討

ESD と指導実践のさまざまな側面（教員養成の実践を含む）の検証を引き受ける

レビュークエスチョンとレビューツールの利用

教育実践は、教育制度や教員養成制度のマクロ・メゾ・ミクロレベルで行われる、複雑で重層的なプロセスです。これらすべてのレベルにおいて可能となるような教育的実践を検証することは、非常に重要で広範な作業となります。

「ESD レンズ」レビュープロセスでは、実践の鍵となる領域は、持続可能性に向けた教育の戦略的な再方向づけにおける重要度で選択されてきましたが、より大切なことは、レビュークエスチョンやツールは、教育制度における異なるレベルでの使用や、異なる主題領域や学習領域での使用、そして／またはさまざまな教育関係者（例：とりわけ初等教育の教師、教員養成の担当者、または教科書の執筆者）による使用へ適応させることができるということです。

そのため、レビュークエスチョンやツールを使う人々は、まずどのグループがそのレビューツールを使えるかということを確認し、それからそのツールがその集団でどのように使われているかを検討することができます。しかし多くの場合、教育実践を行うさまざまな集団が同じツールを使う（さしたる改変なしに）ことができるでしょう。

この「ESD レンズ」の項目では、次のようなクエスチョンに取り組みます。

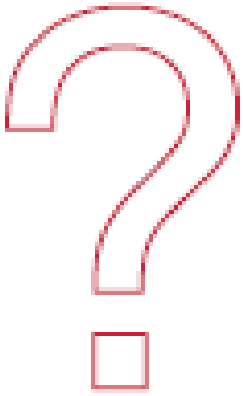
- レビュークエスチョン：ESD は教授と学習の改善をどのように支援することができるのか。
- レビュークエスチョン：ESD は教科のカリキュラムをどのように統合することができるのか。
- レビュークエスチョン：ESD を通じた学習教材はどのように改善することができるのか。
- レビュークエスチョン：ESD は生徒の学習の評価に対してどのような影響を与えるのか。
- レビュークエスチョン：ESD は持続可能な学校づくりに対してどのような支援ができるのか。
- レビュークエスチョン：ESD は教員養成にどのような影響を及ぼすのか。

これらのレビュークエスチョンは、次に挙げる「ESD レンズ」レビューツールに裏付けられています。

- 「ESD レンズ」レビューツール 8：ESD と教授・学習戦略
- 「ESD レンズ」レビューツール 9：教科カリキュラムへの ESD の統合
- 「ESD レンズ」レビューツール 10：ESD と学習教材
- 「ESD レンズ」レビューツール 11：ESD と学習の評価
- 「ESD レンズ」レビューツール 12：ESD と持続可能な学校
- 「ESD レンズ」レビューツール 13：ESD と教員養成

これらすべてのレビューツールは、教師が学校で使用することができます。世界には 7,000 万人の教師がいますが、いずれも ESD をとりいれた指導実践の検証を始める必要があります。したがってこの「ESD レンズ」の文書は、教師や学校の管理者が「ESD レンズ」レビューツールを使うことを支援し、また彼らが実際に行っていることを国の ESD の政策プロセスのなかに送りこむはたらきをします。そのことが、

実践に基づく政策を可能なものとするのです。一方、政策立案者もこれらのツールの使用を勧めます。というのも、このツールは、SD が現場で、学校で、教室や教員養成機関でどのように展開されているかを知る上での有益な情報を提供するからです。政府による ESD を調整するための委員会やフォーラムは、ESD の政策面と実践面の両方に注意を向ける必要があります。これらのツールは、マクロ・メゾ・ミクロレベルにおける ESD の相互作用や複数の関係者の関与を促進します。



レビュークエスチョン：

ESD は教授と学習の改善をどのように支援することができるのか？

目的

変革のための学びを促進するために、さまざまな教授戦略や学習戦略がどのように使われているかを検討します。

このレビューに関与すべき人

教師、カリキュラム開発者、調査官、教科書の執筆者、カリキュラムアドバイザー、そして国の政策立案者と ESD に関心のある関係者。個別クラスの担任教師や教師集団も利用可。

方向性

持続可能な開発のための教育は、カリキュラムのすべての領域に関連する広範な目的の達成を模索するものです。その目的の中には、知識、価値観や態度、思考と意思決定のためのスキル、そして行動的で見識の深いシチズンシップ、そして持続可能な実践に参加し、学ぶことができる能力が含まれます。これらの目的を達成することは、ローカルやグローバルな社会に対する疑問、課題や問題点を調べ、自らが選択した持続可能な実践に参加するため行動する能力を高めるための機会を生徒たちに提供することを意味します。彼らは ESD を通じて、持続可能な開発の原理や実践、概念や分析から浮かびあがった課題に対する知識を明確にし、それらを拡張すること、また異なる情報源や異なる情報形態を利用する機会を得るでしょう。生徒達はまた、多角的に見ることを学び、葛藤や対立に直面し、自分自身が納得できる結論を見い出し、実践的なプロジェクトやアクティビティを通じて人間の幸せと環境を改善するためにグループがどのように行動するべきかを学ぶでしょう（「ESD レンズ」レビューツール 2 と「ESD レンズ」レビューツール 6 を参照）。

この教授と学習に対する積極的なアプローチは、伝統的な教師中心型のアプローチ、これは非常に優れた生徒指導の基本的な概念であり情報でありますが、そのアプローチと学習者・実践者中心型のアプローチとを結びつけます。ESD は、変容のための学習のアプローチ、例えば変化を志向する学習プロセスを支援します。ドラマや物語を使うといった一般的な教授方法は、変容をもたらさない（現状維持を支援）ものにもなり得ますが、変化を志向するより批判的で活発な方法として使うこともできるでしょう。

ESD は変容のための学習を強化する方法、例えば行動のための能力を培うアプローチ[21]の利用を促します。

行動のための能力を培うアプローチは、問題の本質に関わる知識とその範囲（例えば、健康や衛生に関わる課題）の調査に生徒たちを関わらせるものです。どのように問題が生じ、その問題によって誰がどのような影響を受けているのか、対案は何かといったことを考えさせるのです。生徒達はまた、変化のために必要な価値観について考察し、もう一つの未来の展望を構築し、そして社会的、批判的かつ創造的な思考のスキルを発展させつつ所与の文脈の中でどのような変化が起こり得るのかを予想します。こうしたアプローチは、意思決定能力を高めるような実際の状況での経験に生徒達を関わらせることになります。行動する能力のある生徒は、現在進行中の学習や変化のプロセスの中で自分達の行動を評価し、省察し、再構築することもできます。ESD は変容のための学習を同時に許容するような教授戦略の連携を必要とします。

レビュープロセス

レビューツール 8 は、ESD の目的を達成するために適切な教授・学習戦略の再検討を始めるために 3 段階のプロセスをとります。このレビューは一般的な教育の教授・学習、特定の課題領域、または就学前・初等・前期中等・後期中等教育等といった特定の教育課程に対して行われるかもしれません。

- ○ 教授・学習のアプローチが検証できる注目すべき領域、例えば教育段階や主題領域（小学校における地理の指導方法など）の選択から始めましょう。このレビューは異なる教科から引き出される統合的なテーマや話題（水のテーマなど）を背景に行うこともできます。
- ○ 第一の欄は、教授・学習戦略の一覧であり、主に教師中心型のアプローチから、より学習者中心型のアプローチへと並べられています。そこに示された戦略の一覧を再検討し、そこでのレベルや教科領域で行われている他の革新的な戦略を追加しましょう。
- ○ あなた自身の背景に基づく例を提示し、そして／または、教授戦略が ESD のためにいかに利用されうるかを第二の欄で提案しましょう。
- ○ ESD の変容をもたらす学習プロセスの組み合わせにおいて、複数の方法論がどのように利用されうるのかという提案を第三のコラムで行いましょう。

フォローアップの手続き

- ○ ESD に基づく教授・学習戦略の利用を高めるために行われるべきことを決めましょう

行動計画

- ○ これらのアプローチを教師教育や学習教材に取り入れるために必要な 3 つかそれ以上の重要な行動を決めましょう。そのアクションプランをこの文書の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

[21] 原文は ‘action competence approaches’という複数形が用いられている。（監訳者注記）

「ESD レンズ」　レビューツール 8

教授・学習戦略

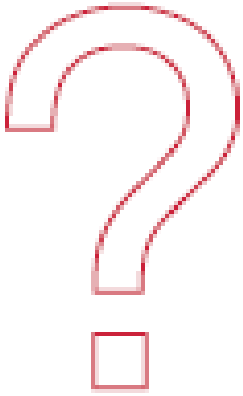
このレビューツールは、教師中心型アプローチと学習者中心型アプローチの間のバランスをとること、そして異なるアプローチを ESD の学習プロセスにどのように結合することができるのか、ということを促します。

利用対象者：教科担当の教師または教師集団／特定の段階や学年を担当する教師のグループ、または自らの実践の再検討を希望する教師個人

利用時のヒント：始めるまえに検討を行いたい主題領域を決めておきましょう。「ESD レンズ」レビューツール 2 と 6 を利用します。

教授・学習戦略と＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿へのアプローチ （段階／主題領域）	事例とそれを教科教育で使用するための方法	この戦略は変革のための学習にいかに取り入れることができるか
クラスの発表会：生徒が個人やグループで課題に取り組み、クラスで発表する		学習プロセス： ステップ 1 ： ステップ 2： ステップ 3： ステップ 4： ステップ 5： など
教師主導、生徒主導のストーリーテリング：関連する課題を提起する物語		
ゲストスピーカー：社会、環境、文化、経済など異なる部門による、持続可能な開発に関する今日的な問題、課題やその解決の話をきく		
教師の指導によるディスカッション：例．二チームに分かれてのディベート		
生徒のグループディスカッション：生徒による議題提案とファシリテーション		
体験学習：地域社会での課題取り組み、フィードバックを含む		
教育ドラマ：生徒が ESD 関連のドラマを見て話し合う		
写真、絵、表、グラフ、地図などの分析：生徒がグループで情報分類し振り返りをする		

教授・学習戦略と＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿へのアプローチ （段階／主題領域）	事例とそれを教科教育で使用するための方法	この戦略は変革のための学習にいかに取り入れることができるか
映画、ビデオ、コンピュータを使った学習：生徒が全体的な予備知識を持ち、それぞれ個々に取り込む		ESD と共に言語と計算スキルの向上に積極的に取り組む
調べ学習：生徒がグループ研究のテーマを選び、課題を割り当て、結果をまとめる		
価値の究明と分析：生徒が賛否の分かれる議題について話し合い、価値観を認識し、意見を戦わせる		
シミュレーション、ロールプレイ：生徒が意見の異なる立場の人を演じ、議題について話し合う		
将来の問題解決：生徒が将来の問題（例．水の供給）について議論し、解決策を示した関連図(ウェビング)を作成する		
フィールドワーク：教室外での学習；例．地域のごみ処理場見学とその振り返り		
コミュニティシティズンシップ計画：地域社会の人々との計画づくりと実行		
その他のアプローチのリスト　例．ケーススタディ、批判的なメディア分析、教師と生徒の対等な立場での授業、など		



レビュークエスチョン：

ESD への関心は、教科のカリキュラムや学習領域にどのように統合することができるのか？

目的

ESD を取り入れたさまざまな教科のカリキュラムや学習領域の広がりについて検討します。

このレビューに関与すべき人

教師、カリキュラム開発者、調査官、教科書の執筆者、カリキュラムアドバイザー、そして国の政策立案者と ESD に関心のある関係者。個別クラスの担任教師や教師集団も利用可。

方向性

正規のカリキュラムは、いくつかの関連しあう要素で成り立っています。その要素とは、教育や特定教科の目的や対象、知識の選択と優先順位付け、選ばれた教授と学習のアプローチ、教師が使用する事例や学習教材、学習を観察し、査定する方法、およびその組織での学習環境全体を含みます。さまざまな「ESD レンズ」レビューツールを利用して、こうしたことを取り扱うことができます。

持続可能な開発のための教育は、既に過密状態にあるカリキュラムに付け加えられる新しい内容でも課題でもありません。持続可能な開発に関連する話題、課題や問題としては、例えば大量消費、貧困、気候変動、輸送、水と公衆衛生、平和と人権などが挙げられますが、確かに生徒たちは、地域や国、グローバルな社会で見識と責任ある市民としての役目を果たすための準備の一環として、これらの問題を学ぶ必要があります。

ひとつの専門分野に特化するやり方では、相互に関連し合う社会、環境、経済や文化といった持続可能な開発の側面を包含する諸問題に対する評価と理解を生徒たちに提供することができません(「ESD レンズ」レビューツール 2 と 6 を参照)。実際、別々の専門分野で活動している専門家たちが現実の世界で起こっている問題を解決することができないのと同じように、すべての教科領域を念頭に置くことができない限り、生徒たちも持続可能な開発について学ぶことができません。生徒たちには、学際的な視点からこうした課題を考える機会が必要なのです。ユネスコのレポートは、持続可能な開発のための学習を個別の教科学習と学際的な学習の両方と統合することを推奨しています。

持続可能性に向けた教育の基本的な前提は、かたちあるものにはすべて生命の全体性と相互依存性があるということと同様に、そのことを理解し、その持続を確実なものとするような統合と全体性もあるはずだということです。このことは学際的な問いと行動を要請します。もちろん従来の科目領域を利用するのを止めるということを示唆するものではありません。専門的な視点はしばしば有効で、必然ですらあり、飛躍的な進展や発見を必要とするような深い問いを許容します。[22]

この「ESD レンズ」の文書の含意は、持続可能な開発のための教育とは、社会的平等、経済的活力、文化的多様性と環境保全に関連する主要な領域を取りまとめたものに依拠しているということです。これらの領域は、複雑にからみあった持続可能な開発の課題についての意思決定を行うために必要な基本的な理解を提供します。そのような決定を行う際、生徒たちは広範な領域、例えば生態学、地質学や地理学；経済学、金融と法律；歴史、カルチュラル・スタディーズ、社会学、芸術などから概念を導き出し、それを統合します。このような持続可能な開発の教科横断的な視点の意味するところは、すべての教科学習がそれぞれの教科の領域やカリキュラムと関連する持続可能な開発の原則や概念に対する生徒の理解を進展させる必要があるということです。以下に、ESD に関するいくつかの主要な概念の例（レビューツール 2 を参照）を示しましょう

- 相互依存性
- 多様性
- 人権
- グローバルな公正と正義
- 価値観と生活様式の選択
- 保護
- 経済的活力
- 民主主義と市民的参加
- 予防原則

レビュープロセス

「ESD レンズ」レビュー9 を使う前に、レビューを行う人は「ESD レンズ」ツール 2 と 6 を完成させ、ESD にむけて自分たちの文脈の中で何を優先すべきかといった明確なビジョンをもつよう促されています。それは ESD の相互関係的な社会・文化・経済と環境面に取り組むことでもあります。概念のすべてがカリキュラムの前段階と必ずしも関連するというわけではなく、異なる、おそらくは単純な用語としてシラバスに表現されるかもしれないということに留意しておきましょう。

「ESD レンズ」レビューツール 9 を使いながら、どの教育段階を検討するのかを決定しましょう。もしそのツールがワークショップの現場で用いられている場合であれば、複数のグループに分かれ、いっせいに異なるレベルを検討することもできます。

このレビューツールは、すでにカリキュラムに統合されている ESD の範囲と、どのような変化または改善が可能なのかといったことを規定するための手助けとなるでしょう。

[22] UNESCO (1997). op.cit., para 89.

フォローアップの手続き

○ いったん検証が終わったら、ESD が異なる教科や専門分野に統合されている範囲についてじっくり検討し、どのような点を変化または改善すべきかを確認する。

○ 学際的なアプローチはどのように強化され、発展するのかといった点についても熟考する

行動計画

○ このレビューをさらに進めるために行うべきことを三つかそれ以上決めましょう。そのアクションプランをこの文書の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」レビューツール 9

ESD のカリキュラムへの統合

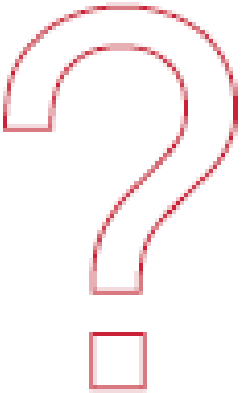
このレビューツールは、ESD がカリキュラムに統合される範囲に焦点を当てます。「ESD レンズ」レビューツール 2 と 6 の結果を利用しましょう。

利用対象者：クラス担任、カリキュラム立案者、課の責任者、カリキュラムアドバイザー、政策立案者、ESD に関心のある関係者

利用時のヒント：このレビューのために、対象となる分野を決めるとよいでしょう。そしてその対象領域ごとに検討が行われ、その結果は全体会に報告することも可能です。これは望ましいホールスクール活動です。この実践は、カリキュラムの再検討を担当している政府の部局の人々も使用できます。

検討する教育レベル： 選択：就学前、初等、中等前期、中等後期、または特定の学年					
対象範囲 学習範囲	シラバスまたはカリキュラム	目的		概念、テーマ、例	
	この欄には ESD に関するシラバスやカリキュラムの名前を記入する	この欄にはどのように学習目的が ESD を反映するか(左の欄)、どのような問題(社会、文化、経済、環境の)が存在するか(右の欄)を記入する		この欄には、ESD を反映する概念、話題、または事例を挙げ(左の欄)、それぞれにどのような問題があるか(右の欄)記入する	
農業学習					
芸術	例．美術、音楽、ダンスの指導要領				
商業、ビジネス学習					
第 1 言語学習(母語指導)					
第 2 言語学習(追加言語)	例．英語のシラバス		例．口頭文化の融合		

検討する教育レベル： 選択：就学前、初等、中等前期、中等後期、または特定の学年					
対象範囲 学習範囲	シラバスまたはカリキュラム	目的		概念、テーマ、例	
	この欄には ESD に関するシラバスやカリキュラムの名前を記入する	この欄にはどのように学習目的が ESD を反映するか(左の欄)、どのような問題(社会、文化、経済、環境の)が存在するか(右の欄)を記入する		この欄には、ESD を反映する概念、話題、または事例を挙げ(左の欄)、それぞれにどのような問題があるか(右の欄)記入する	
健康、身体の学習					例．大量消費
家庭科/消費者学習					
手作りアート、デザイン、技術(情報通信技術を含む)					
数学					
宗教教育					
理科	例．科学のシラバス				
社会学					
他科目の追加（例．観光学など）					



レビュークエスチョン：

持続可能な開発のための教育を通じて、学習教材をどのように改善することができるのか？

目的

ESD の内容や教授法についての既存の学習教材を再検討します。

このレビューに関与すべき人

教師、カリキュラム開発者、調査官、教科書の執筆者、カリキュラムアドバイザー、そして国の政策立案者と ESD に関心のある関係者。個別クラスの担任教師や教師集団も利用可。

方向性

この学習教材のレビューは、教材の多様性と関連性に大きく寄与することができます。また ESD は新しい教材の設計や、教材をつくるためのより幅広い視点を提供します。大きなコミュニティでおこる問題や課題、ここには地方の報道も含みますが、それらはすべて学習資源とみなすことができます。学習内容の構築やそれらと環境との関わりもまた学習資源となり得ます。多くの学習資源は、活字化されておらず、より活動的で参加型の学習方法をもたらします。

ESD の目標に向けて教える際、学校や教師が、教科書のような基本的な学習教材を手に入れることが困難な国がある一方で、非常に幅広い教育的資源を入手することができ、その中から選択をすることができる国もあります。しかし、どんな国でも文化的かつ地域の資源を保有しているのです。入手可能な教材としては、教科書、図書館の本、写真集、グラフや地図、映画フィルムやビデオ、CD-ROM やインターネットなどが含まれるかもしれません。地域の文脈に適用したり、インスピレーションを得たりすることを可能にする幅広い事例は、インターネットから自由に入手することができます。

ESD のもうひとつの重要な視点としては、それらの学習資源をより幅広い学習資源へと結びつけるということが挙げられます。博物館や美術館といった地元の利用可能な資源は、ESD に関する分析と問いを立てるための基盤となり得ます。植物園は、ESD についての思考や経験を生み出す豊かな源泉であり、しばしば NGO がそうであるように、それ自体、資源を保有しています。持続可能な開発の活動に関わる企業、政府機関や市民社会団体もまた、有用な学習教材を提供してくれます。ビジネス文書や組織目標、企業の社会的責任に関する報告書は持続可能性を経済の側面から考察するのに利用することができます。

また小規模企業やモノづくりの現場を訪ねることも重要です。なぜなら彼らは入手可能な最小限のものを使用し、持続可能な暮らしと／または地元の流通と生産のプロセスについて学ぶ情報や視点を提供する立場で地域づくりを担っているからです。地方公共団体の文書や計画案は学習資源として使えますが、教育的な目標に向けられた教材が提供されることもしばしばもあります。地域で使用されるということから、ESD の学習資源に対するさらなる取り組みによって、生徒たち自身で学習資源を生み出すことができるかもしれません。学校や大学で得られる知識は、さまざまな社会、そして／または環境の問題を知るにあたって有益であり、関連性があるものとみなすことができます。こうしたアプローチのすべてが幸福や暮らしに関連する教育の質的な関心にかかわっています。ESD の観点から教材を使用しながら生徒の学習を支援するためには、知識があって、能力があり、関心が高く、技術のある教師の指導が非常に重要になるのです。

レビュープロセス

「ESD レンズ」レビューツール 10 を用いてレビュープロセスを始める前に、どの教育段階で、またいかなる分野で、レビューをするのかを決めましょう。欄 1 で入手可能なマテリアルの種類をリストアップします。ESD レンズレビューツール 2 および 6 を使って、マテリアルの内容について振り返る手助けとし、さらにそれらに ESD の知識・技能・価値が十分に反映されているかどうかを見る手立てとします。このレビューツールのおかげで、冊子化されて一般的に売られているマテリアルや文化的にも地域的ににも入手可能な学習教材・リソースを用いるようになります。

フォローアップの手続き

○ 現在不足している新しい学習資源を特定するために、二番目の項目または図を埋めましょう。

○ 「ESD レンズ」レビューツール 10 の結果と、必要とされる新しい学習資源の一覧を見ながら、ESD の内容や課題に焦点化した学習教材の開発と利用方法の改善を目的とする包括的な計画を立てましょう。

○ 教師が取り扱い可能であることを確認するために、一般に出されている学習教材に ESD の学習教材を統合するための行動計画を立てましょう（例：これは教育系の出版社や学習教材を供給する責任を追っている省庁とのワークショップにつながるかもしれません。また、ESD の目標に向けた学習教材の使用を強化するための教師教育や教員養成プログラムに関わるかもしれません）。

行動計画

○ このレビューの前をさらに進めるために行うべきことを三つかそれ以上決めましょう。それをこの文書の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」　レビューツール 10

ESD と学習教材

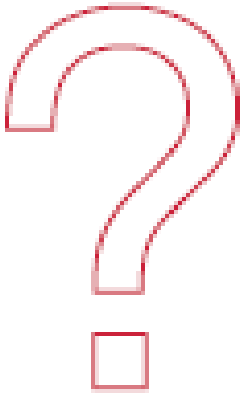
このレビューツールでは、「ESD レンズ」レビューツール 2 と 6 の結果を使用します。これは ESD の内容や教授法のために、学習教材を再検討するものです。

利用対象者：教科書の執筆者、国のカリキュラム／教科書の採択委員会、テキストを選ぶ権限を持つ教師、政府主催の ESD フォーラムまたは調整委員会

利用時のヒント：もし政府が提示している教材の検討を行うのであれば、この作業を複数のグループに割り振りましょう。学校の教師もこの作業をグループに分割することを望むかもしれません。

A. 教授・学習資源（活字になっており、市販されているもの）	その入手可能な学習資源の中の話題は、ESD の知識、スキル、価値観を反映しているか（レビューツール 2 を参照）	その入手可能な学習資源は、変容的学習目的を持っていて、意思決定とシチズンシップを発達させるか	その入手可能な学習資源は、背景事情と関連があるか、また研究と調査に基づいた学習を促進しているか
教科書			
物語			
図書館の本			
チャートとポスター			
写真			
地図			
体系的情報			
新聞と雑誌			
研究設備			
フィールドワーク設備			
コンピュータープログラムと CDRom			
インターネットの利用			
ロールプレイとゲームによる学習			
映画、ビデオ			
その他			

B. 教授・学習資源（文化的、地域的に入手可）	文化的、地域的に有用な学習資源がいかに ESD の知識、スキル、価値観の進展に活用できるか（レビューツール 2 参照）	文化的、地域的に有用な学習資源が、積極的で変容的学習、意思決定、シチズンシップ目標を補強するためにどのように活用できるか	背景事情に見合う文化的、環境的な学習資源が正規のカリキュラムの内容をいかに進展させているか、またその資源は研究と調査に基づいた学習に活用できるか
有用な文化的資源のリスト（例. 物語、美術館、地域に関する知識、ゲストスピーカーなど）	例. 持続可能性の実践についての地域の知恵	例. 持続可能性の実践を実行するための地域の知恵	
有用な環境的資源のリスト（例. 自然保全、湿地帯、建設場所など）	例. 環境への影響の理解 生態系とその機能についての理解		例. 環境への影響に関する評価の実施
その他			



レビュークエスチョン：

ESD は生徒の学習の評価にどのような影響を与えるのか？

目的

ESD の考察を通して、評価の実践はいかに改善することができるかを考えます。

このレビューに関与すべき人

教師、カリキュラム開発者、調査官、教科書の執筆者、カリキュラムアドバイザー、そして国の政策立案者と ESD に関心のある関係者。

方向性

この学習教材のレビューは、ESD と生徒の学習に対する査定に焦点を置いています。ESD はさまざまな学習の成果と学力の範囲を価値づける評価の形式に関与することができます。ESD を含むタイプの学習は、シチズンシップの達成と実践的で応用可能な学習や技法を認めるような、より拡張された複数の査定方法を考慮に入れます。査定は、生徒たちの学習の効果と課題を診断し、保護者に報告し、雇用主や他の教育機関が利用する修了証明書を発行するために、生徒の学習成果をモニタリングする過程に言及します。査定はしばしば、生徒たちが成功するための最高の機会を持っていることを保証する目的で、カリキュラムや学習経験を引き出すために要請されます。こうしたさまざまな目的に基づき、形成的評価と累積的評価という二つのタイプの査定が生じます。

ESD の査定では、形成的評価と累積的評価の両方を統合する必要があります。また「ESD は異なるものを評価しようとしているのか、それとも同じものを異なるやり方で評価しようとしているのか」という疑問は、ESD と査定について考えるうえで、非常に重要な問いとなります。ESD の査定は、教育的な質の向上に方向づけられるべきです。ESD の学習成果の査定は、量的なものでありうるでしょう（テストの点で反映される ESD の解釈を含む場合）。一方、ESD の学習成果の査定は、質的なものでもありうるのです（コミュニティによる ESD プロジェクトの実践や、生徒の行動能力の発達についての質を判断する基準を利用する場合）。

ESD の目的の査定には、査定やカリキュラム計画、実践されている学習活動についての創造的な見直しを必要とします。こうした意欲的な活動は通常、質的で到達度をみる評価を求めます。例えば、変容的学習や行動能力の発達を査定するためには、到達度を質的に見る次のような質問が有効かもしれません。

生徒は、

○　対応する必要のある問題や課題の特定に貢献したか？
○　さまざまな知識源をつかって課題を探求したか？
○　その課題に関する最新情報、関連情報を把握していたか？
○　その課題と関わりがあるであろう選択的な未来展望を持っていたか？
○　為すべきことについての現実的な戦略を提案したか？
○　次に行うことに関する意思決定を支援したか？
○　他の生徒たちと協力的に行動することができたか？
○　その課題に関する対話やディスカッションに積極的に参加したか？

こうした教育的プロセスのほかに、ESD の査定はどのような課題や話題にも関係している文化・社会・経済・環境面がどれぐらい統合されているのか（例．大量消費）を検討します。そのことも考慮に入れた場合、査定の項目には次のような問いを含むことになるでしょう。

生徒は、

○　その課題／話題についての社会的・経済的・環境的・文化的側面を特定したか？
○　それらの異なる側面がなぜ、あるいはいかにしてその課題／話題に貢献しているのかを特定したか？
○　問題解決の過程において、その課題／話題のどのような側面により注目すべきかを決定することができたか？

このような例から、ESD に関する査定では、知識を伴うさまざまな方法を査定するだけではなく、問いを立てることや行動に関わるプロジェクトやプロセスに参加する生徒の能力を考慮にいれる必要があることは明らかです。これは、ESD の査定がいかにしてカリキュラム活動を遡及的に報告しようとするのかという事例を提供します。

ESD は既存の教授法と査定方法を特徴づけ、既存の実践に対して新しい知見をもたらすこともできます。例えば知識を評価する際、ESD の知見はそのような知識がどのように応用することができるのかを問うかもしれません。スキルを評価する際には、ESD の知見は、そのスキルがどのような価値観を有しているか、そして生徒は、そのスキルを使いながら倫理的に伝えられた方法で行動することができているかどうか（例：意思決定のスキル）を問うかもしれません。価値観を評価する際は、ESD はどのような価値観が評価され、何が最終的な結末となるのか（例．競争力という価値観は持続可能な思考に貢献するか否か）を問うかもしれません。

レビュープロセス

既存の査定における実際の形式を再検討し、ESD にむけてどのような新しい査定の形式が求められているかを考察するために、「ESD レンズ」レビューツール 11 を使いましょう。そして提案されている査定の形式が、(「ESD レンズ」レビューツール 6 で論じられたように）質の学習の成果に貢献しているかどうかを話し合いましょう。

フォローアップの手続き

○　このレビューを行った後、実際の査定を変えるために何をすべきか、またそれはどのように実行されうるのかを考えましょう。そしてその議論を元に行動計画を立てましょう。

行動計画

○　このレビューをさらに進めるために、行うべきことを三つかそれ以上決めておきましょう。それをこの文書の最後にある「「ESD レンズ」行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」　レビューツール 11

ESD と評価

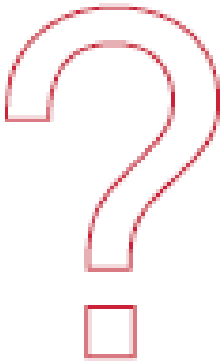
このレビューツールでは、「ESD レンズ」レビューツール 2、6 と 8 の結果を使用します。ここでは、ESD に適合するために、実際の評価がどのように変化すべきか、ということについて検討します。

利用対象者：評価機関や評価委員会、教師、対象となる委員会、カリキュラムアドバイザー、国の ESD 委員会やフォーラム

利用時のヒント：どのような領域を再検討するのかを決めましょう。作業は領域別または段階別のグループで行いますが、マクロな政策評価を開発するために、国レベルで行うことも可能です。

評価の種類	その評価戦略が ESD の理解と目標の評価にどのように適応されるべきかを説明する - レビューツール 2 と 6 を参照	その評価戦略が ESD の学習アプローチの評価に利用できるかを説明する（例. ESD のスキル、変容的学習） -レビューツール 2 と 8 を参照	その評価戦略が ESD 的な価値観の評価にどのように利用できるかを説明する（例. シチズンシップ、人間と環境の尊重など） レビューツール 2 を参照
定期試験			
期末試験			
学年末試験			
継続的成長評価			
実践評価			
仲間による評価、自己評価			
その他			

評価技能			
多肢選択式のテスト			
地図や図の解釈			
単語テスト			
正誤判別テスト			
短文回答テスト（段落の回答）			
理解度試験			
講義形式や口頭プレゼンテーション			
ディベート演習			
ロールプレイの実践			
課題作文			
自由作文			
社会科見学記録			
図書館やインターネットの研究論文			
ポスターや絵、創作プレゼンテーション			
プロジェクト集			
その他（例．建築、モデル構築)			
	ディスカッション・ポイント この評価アプローチは、ESD が推奨する質の教育の成果をどの程度評価するのか（レビューツール 6 を参照）－知ることを学び、為すべきことを学び、人間として生きることを学び、共に生きることを学び、そして自分自身や社会を変容することを学んでいるか？		



レビュークエスチョン：

ESD はサスティナブルスクールづくりをどのように支援することができるのか？

目的

学校が ESD の原理や実践をどの程度反映しているか、そして改善が見込まれるのはどのような点であるかを再検討します。

このレビューに関与すべき人

教師、学校管理者、保護者、学校に関心のある地域の関係者

方向性

このレビューは、ESD の原理や実践が学校カリキュラムや学校での他の実践にどのように反映されているのかを検討することに焦点を置いています。学校のカリキュラムの再検討は、学習に影響を与える学校や教室環境と構造に関わるすべての側面についての意識的に考察し、またそうした側面が生徒の学習の指南と向上を保証することに関わっています。これは「案内型カリキュラム」[23]と呼ばれてきましたが、学校の目的や価値観、方針、社会的実践や環境に関する実践のような、学校づくりの要素の影響に注意を向けたものとなっています。

世界の多くの教育システムは、持続可能な学校の運営やカリキュラムを推し進めるための方針の枠組みを持っています。その枠組みは「サスティナブルスクール」「持続可能な未来のための学校」「グリーンスクール」「エコスクール」「環境学校」などといった多くの呼称で知られていますが、どのように呼ばれようとも、そうした方針の枠組みに焦点を当てることは、正規のカリキュラムとノンフォーマルなカリキュラムの両方が、持続可能な社会のモデルを生徒に提示する役割を担うための戦略に関する指針を学校に提供することであり、そのことが校内の持続可能性へのホールシステム・アプローチを促進することになります。ESD は持続可能な学校になろうとする学校組織の手助けとなります。ESD のホールシステム・アプローチは、「サスティナブルスクール」が 5 つの領域での活動を計画するさいに注意を払うべき点として以下のことを挙げています。

- ○ 正規のカリキュラムの中で提供される授業は、ESD の目的や原理を反映すべきである
- ○ 文化の持続可能性を支援する指針や手続き

[23] 原文は ‘guided curriculum’。

○　社会の持続可能性を支援する指針や手続き
○　経済の持続可能性を支援する指針や手続き
○　環境の持続可能性を支援する指針や手続き（「ESD レンズ」レビューツール 12 のサスティナブルスクールの監査の項を参照）

第一の提案は正規のカリキュラムへの言及であり、残りの 4 つは学校の基本精神や運用手続きにかかわる学習システム、あるいはノンフォーマルなカリキュラムへの言及です。重要なことは、これらの提案は相互に関連するという視点として捉えられるものである、ということです。例えば、経済の持続可能性を後押しする政策や手続きは、環境の持続可能性や社会・文化の面からの持続可能性をも後押しできるよう努めるべきです。政策や手続きは ESD の価値観と原理に基づく必要があります。

持続可能な学校の構想を支援することができる政策や学習指導要領[24]があるかもしれません（例：学校で扱われる社会的な持続可能性の実践に影響を与える人権政策）。学校コミュニティの関与、ジェンダーの問題、多文化主義、反人種差別、学校環境政策、校舎や敷地の管理に影響を及ぼす政策やガイドラインなど、ESD の包括的な政策方針が学校内に、あるいは ESD に関わる広範な文書の山がカリキュラムの中にあるかもしれません。もしそのような指針がないのであれば、「ESD レンズ」レビューツール 12 を使って指針をつくることが可能です。「学校の持続可能性に関する監査」[25]（「ESD レンズ」レビューツール 12 に含まれている）や、学校コミュニティの持続可能な開発のつながりやパートナーシップを示すための持続可能な学校プロジェクト（例：地元の生産・消費活動の持続可能性に加え、学習者が栄養と健康的な食べ物を摂れるよう地元で健康に良い食材を生産する）といったツールも使えるでしょう。

学校は評価計画の一環として 5 つの領域での活動に関して、定期的なーおそらく 1 年ごとのー監査を受けることが可能です。持続可能性の監査結果は、学校改善のために、次年度の戦略的な計画の中に盛り込まれます。こうした ESD の監査は、持続可能性について話し合い、意思決定を行う際に、学校コミュニティを巻き込むための機会としても利用できます。

レビュープロセス

監査チームを校内に立ちあげましょう。レビューや監査チームには、例えば、学校の管理者、教師、生徒や地域住民など、複数の関係者の混成でつくられる必要があります。別の方法として、クラスのプロジェクトとして、生徒が行うということもあるかもしれません。

レビューツール 12 は、異なる社会・経済的背景、学校背景、または国の事情のもとでも適応させ、変えることができます。ただしレビューツール 12 は、学校でのより包括的な持続可能性の監査とはどのように行われるのか、といったことに関して、その入口で若干のアイデアを提供するにとどまるものです。

---

[24] 原語は ‘curriculum guidance’ であるが、「学習指導要領」と意訳してある。（監訳者注記）
[25] 原語は‘School Sustainability Audits’ 。レビューツール 12 では ‘Sustainable Schools Audit’ として一覧表になっている。（監訳者注記）

フォローアップの手続き

○ いったんこのレビューが完了したら、持続可能性に向けた学校の行動計画を立て、それを学校の他の方針や戦略に組み込んでみましょう。

○ 持続可能性に向けた学校の行動計画に関わる現在進行中のプログラムを追跡するためのモニタリングと評価のプロセスを開発しましょう。学習者や保護者を含む、複数の関係者がこのプロセスに関わることができます。

行動計画

○ 今後、学校の持続可能性への監査の際に求められるであろう行動を三つかそれ以上決めておきましょう。それをこの文書の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」　レビューツール 12

ESD とサスティナブルスクール

このレビューツールでは、ESD に向けた学校のホールシステム・アプローチに焦点を当てます。このツールは、カリキュラムの側面、文化の側面、環境の側面、経済の側面を含む ESD の重点領域で改善されるべきことを認識するために、学校が監査を受けることを勧めるものです。このレビューツールは変化と改善に向けた目標を設定しようとする学校をサポートすることができます。サスティナブルスクールがどのようなものであるのか、という基本的な見通しを立てることからはじめましょう。

利用対象者：学校管理チーム、教師、生徒、保護者及びより広い学校コミュニティ

利用時のヒント：レビューを行い、ホールスクールへその報告を返すために、学校の持続可能性のためのワーキンググループ（教師、保護者、学習者、学校の管理者を含む）を立ち上げましょう。監査に基づく目標の設定は、学校全体でなされなければなりませんし、学校管理者によって承認されるべきものです。

レビューを行うカリキュラムやホールスクールづくりの開発	レビューの範囲（再検討する学校の政策と実践、その他完成した「ESD レンズ」レビューツールによる助言）	学校の ESD に向けたホールシステム・アプローチの貢献度（「ESD レンズ」レビューツール 2,6,7,8,9,10,11 を参照）	学校方針と実践の改善とさらなる発展への意見やアイデア
正規のカリキュラム	カリキュラム編成	カリキュラムにおける ESD の要素	
	教授・学習戦略	カリキュラムにおける ESD の要素	
	教室での学習教材	入手可能な ESD の学習教材	
	評価の実践	ESD に適応する評価	
	教師の専門性の発展	教師の ESD プログラム	

レビューを行うカリキュラムやホールスクールづくりの開発	レビューの範囲（再検討する学校の政策と実践、その他完成した「ESD レンズ」レビューツールによる助言）	学校の ESD に向けたホールシステム・アプローチの貢献度（「ESD レンズ」レビューツール 2,6,7,8,9,10,11 を参照）	学校方針と実践の改善とさらなる発展への意見やアイデア
学習システム／ホールスクールとしてのレビュー	校舎と校庭のデザインと建築	社会的／経済的／環境的／文化的側面	
	エネルギーの利用と消費	経済的／環境的側面	
	水の利用と消費	経済的／環境的側面	
	紙の利用と消費	経済的／環境的／文化的側面	
	ゴミの管理	環境的／経済的側面	
	学校への交通	経済的／環境的／社会的側面	
	学校給食	経済的／社会的／文化的側面	
	ジェンダーの公正	社会的／文化的側面	
	子どもに優しい学校づくり	社会的側面	
	発達または身体障害のある生徒への支援	社会的側面	
	地域社会の事業への生徒の参加	社会的／文化的側面	
	学校の政策決定へのコミュニティの参加	社会的側面	
	学校の政策決定への生徒の参加	社会的側面	
	地域経済、持続可能な暮らし、持続可能なライフスタイルの取り決め	経済的／環境的／文化的側面	
その他			

持続可能な学校の監査

正規のカリキュラム	とても良い 4	良い 3	普通 2	これから 1
1. 私たちの学校には持続可能な開発のための教育の目標と目的が明文化された指針がある。				
2. 複数のカリキュラムが交錯するテーマである ESD に関して効果的な調整がなされている。				
3. 全ての教科を通じて、持続可能な開発の諸問題を紹介するためのあらゆる機会を設けている。				
4. 全学年において持続可能な開発の諸問題に関する教材が十分に行き渡っている。				
5. 持続可能な開発についての教えが効果的であるかどうか定期的に評価している。				
正規のカリキュラム：小計				

社会の持続可能性	4	3	2	1
6. 学校とカリキュラムに浸透しているエートスはジェンダーの公正に関する問題への感度がある。				
7. 生徒は地域のコミュニティの問題解決の手助けに積極的に参加する機会とスキルを与えられている。				
8. 学校とカリキュラムに浸透しているエートスのお陰で、グローバルな共同体の市民として生きていくための備えが生徒に十分になされている。				
9. すべての生徒、とりわけ身体障がいや学習障がいのある生徒の特別なニーズが満たされている。				
10. 生徒が前向きに行動していく手助けになるように、すべての職員が対立解決（コンフリクト・リゾリューション）の戦略にかかわるスキルを身につけている。				
社会の持続可能性：小計				

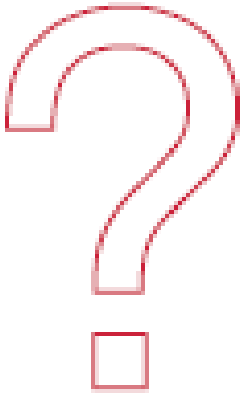
環境の持続可能性	4	3	2	1
11. 学校は可能な限りリサイクル製品を使用しており、また積極的で包括的なリサイクル方針を持っている。				
12. 学校はエネルギーの効率化を積極的に推進し、実践している。				
13. 学校は地球への影響を最小限に抑えるという観点から資源を購入・使用している。				
14. 校舎やその周辺は、生活したり学んだりするためには美的に満足のいく環境を提供している。				
15. 学校はケアの姿勢や自然に対する責任感を積極的に向上させている。				
環境の持続可能性：小計				

経済の持続可能性	4	3	2	1
16. 学校における資源の分配において、競争ではなく共同と共有の精神が具現化されている。				
17. 生徒は学校や地域のプロジェクトを組む機会を通じて、小規模ビジネスのスキルを学んでいる。				
18. 生徒には、校内で資源がどのように分配されるのかという決定に参加することができる。				
19. 維持管理の文化があり、すべての校舎や設備がうまく修復され、よい状態のまま維持されることを確かなものにしている。				
20. 学校の資金調達活動は、倫理的な原則を反映したものとなっている。				
経済の持続可能性：小計				

文化の持続可能性	4	3	2	1
21. 学校のエートスは自尊感情や尊敬しあう関係、思いやりのある社会関係を促進している。				
22. 学校とカリキュラムに浸透しているエートスのおかげで、多文化社会で生きていくための備えが生徒に十分になされている。				
23. 学校は、学校の内部とより広いコミュニティの双方で文化的多様性を支援するための積極的な役割を担っている。				
24. 学校は、学校内外のコミュニティで積極的な役割を担っている。				
25. 学校に浸透しているエートスは、人々が大事なのであり、誰もが持続可能な開発に貢献できる何かをもっているということを示している。				
文化の持続可能性：小計				

5 つの小計を下の表に写し、満点を 100 として合計を計算しましょう。得点がより高い領域は ESD に向けた学校の方向づけが進んでいることを示します。より低い得点は、どのような改善が可能であるかを示し、将来の行動計画と優先度を教えてくれるでしょう。

正規のカリキュラム	
社会の持続可能性	
経済の持続可能性	
環境の持続可能性	
文化の持続可能性	
合計	



レビュークエスチョン：

ESD は教師教育にどのような影響を与えるのか？

目的

ESD が教師教育の実践に組み入れられる範囲について再検討します。

このレビューに関与すべき人

教師教育の指導者、教師教育に責任を追っている文部科学省、国の ESD 調整委員会やフォーラム

方向性

世界にはおよそ 7,000 万人以上の教師がいます。そしてその一人ひとりが持続可能な開発のために鍵となる実践者です。こうした理由から、教師教育に適切なかたちで焦点を当てることは、持続可能な開発のための教育にとって重要な一部となります。この「ESD レンズ」で取り扱う話題に関連して、教師教育における ESD も次のような理由から欠くことのできないものです。

- 政策展開や計画の立案は、もし教師がそれらを実行する方法を知らないなら、あるいはそれを行う動機を持たなければ、効果的なものとはならない。
- 実践者は、実際の状況に見合った ESD の知識の情報源であり、時にはより多くの人々と共有できるような創造的な発展の源となる。
- ESD はその地域での利用や関連性を強調するため、学校が置かれ得る特定の状況と学習とをよりしっかりと結びつけるような戦略を教師が学ぶことは非常に重要である。
- 平和や社会的連帯のような教育のさまざまな社会的目標を満たすために、教師は ESD の基礎知識を身につける必要がある。
- 文化理解や、環境の持続可能性と環境保全・保護に貢献するために、教師は ESD を通して十分な情報を提供されている必要がある。
- 持続可能な学校となる手助けをするために、教師は ESD を理解する必要がある。

初任者研修に関連して、ユネスコの「持続可能性に向けた教師教育のガイドラインと提言」は次のように論じている。

教員養成機関は、グローバル教育の領域で極めて重要な役割を果たしている。将来の世代の知識やスキルを形づくるであろう教育システムに変化をもたらす潜在性を有している。時に教育は、より持続可能的な未来を創造するための大きな希望として見なされるが、教員養成機関は、そのような未来が実現するよう、教育と社会を変容させる重要な主体としての役割を果たしている。

多くの教員養成機関では、カリキュラム編成や学習教材の選択、学習体験の計画を立てる方法を新人教師に理解させるというニーズにいっそう応えようとしているため、生徒は幅広い知識や思考力、意思決定力、持続可能な開発のための教育の目標である価値観、態度やシチズンシップを獲得することができます。しかし、教員の多くは、ESD のプログラムが開発される前に研修を受けているため、生徒の持続可能な開発のための目標到達を支援できるために教師に必要となるあらゆる能力を開発する機会を失しています。したがって、継続的な専門能力の開発は非常に重要になってきます。生徒が持続可能な未来についての選択的展望を創造し、評価できるようになるための学習経験、そしてそのよりよい社会の展望を現実のものとするために他者と創造的に協働するための学習経験を計画するのに必要な知識とスキルの獲得をすべての教員に保証するためです。

ESD は、省察的実践の機会を提供するという意味においても、また「ESD レンズ」で見られるような関連要素の豊かな相互作用の側面という意味においても、教員養成プログラムを改善するために役に立ちます。

ESD は、変革と振返りのサイクルが内在する指導、とりわけ省察的実践を重視する指導についての実践研究を後押しします。ESD は、実践者は学習を地域の文脈に適応させることのできる創造力の源であると考えますが、教員養成はそうしたスキルがあらゆる学習領域でも使えるようにさらに磨きをかけることを支援します。ESD の相互作用の側面は、社会のさまざまな人々と連携するために、教師を教室の外へ連れ出します。そこでは教育のリーダーシップが社会的資源として価値を持ちます。学校と、ESD を支持する社会の異なる部門との間で協働する場をつくることは、ホールスクールに向けた豊かな足がかりとなり得ます。地域の知恵にかかわる ESD を重視することは、地域と関わり合い、また学びの場に保護者をさらにいざなうための機会を教員に与えます。重要なことは、これらは教師教育のプログラムによって下支えされる必要があります。それはおそらく特定のプロジェクト単位での評価基準を持つモジュールを通じて行われるでしょう。

レビュープロセス

「ESD レンズ」レビューツール 13 は、国・組織・またはプログラムレベルで使用することができます。レビューを始める前に、どのレベルに焦点を当てるのかを決めておきましょう。教員養成プログラムの中で ESD に関連する現行の実践や、ESD を行う教師に必要な能力を書き入れ、可能な戦略や変更点を特定します。また「ESD レンズ」レビューツール 13 はマクロレベル等でのレビューにも使えます。例えば国の教師教育システムや政策についてより深いレビューを行うといったことが相当します。このレベルでレビューを行う場合は、さらに詳細な調査とレビュープロセスが補われる必要があるでしょう。レビューをすぐに反映させたいなら、教員養成プログラムのレベル（例：カレッジや大学で）で使うことが最も望ましいでしょう。このレベルでの学習はより広い、マクロ的なレビューのプロセスにも影響を与えることが可能です。

フォローアップの手続き

○ いったんこのレビューが完了したら、ESD の統合に向け、形式と内容の双方に関して教員養成プログラムが構築されるために必要な改善点を特定しましょう。

○ そのような改善を行うためにどのような資源とプロセスが必要となるかを検討し、それに基づいて行動計画を立てましょう。

行動計画

○ 教師教育のレビューを進めるために必要なことを 3 つかそれ以上決めておきましょう。それをこの文書の最後にある「ESD レンズ行動計画」の章に書き込みましょう。

「ESD レンズ」　レビューツール 13

ESD と教師教育

このレビューツールでは、ESD をどの程度教師教育に組み込むかという点に焦点を当てます。

利用対象者：教員養成の指導者、教員養成を監督する国の教育庁、国の ESD 調整委員会やフォーラム

A. 教員養成プログラム	それぞれのレビュークエスチョンに関連する現行の実践	可能な戦略／変更点
すべての教師が ESD の重要性を認識しているか。ESD はカリキュラムの全体性を優先するものとして見なされており、またカリキュラム横断的であり、教師教育の政策・組織そして／またはプログラムのレベルで開発されるテーマに関する可能性となっているか。		
ESD は新人教員研修におけるすべてのコア科目（例：教育研究、カリキュラム理論、カリキュラム計画、他の科目を指導するために応用されたカリキュラム研究）に導入されているか。		
ESD は新人教員研修における選択科目に導入されており、教師は希望すれば ESD への理解をさらに深め、スキルを磨くことが可能か。		
教師は、ESD への関与を高め、ESD を実践する能力や ESD 自体を発展させるために、ESD に関する継続的な専門的能力の開発プログラムを受けることができるか。		

B. ESD の能力	それぞれのレビュークエスチョンに関連する現行の実践	可能な戦略／変更点
教師は ESD が持つ国の開発目標や教育目標に対する重要性を見抜く力を深めているか。		
教師は ED の哲学、目的や特性についての理解を深めているか。		
教師は持続可能な開発のための教育が質の教育に与える貢献について理解を深めているか。		
教師は子どもの発達や学習理論がどのように ESD を伝え、高め、強化するのかということに関する知識を深めているか。		
教師はカリキュラム横断型のテーマとして ESD を実践する方法についての理解を深めているか。		
教師はすべての教科が ESD と関連していることへの理解や、教科への ESD の統合が、教科教育をいかに豊かなものにするのかということへの理解を深めているか。		
教師はグローバルで普遍的な問題意識と関連させた上でコミュニティや地域の知恵を取り入れる戦略を構築しているか。		
教師は幅広い ESD の目的を達成するためのさまざまな教授・学習アプローチをとるために必要なスキルを磨いているか。		

モジュール 5

「ESD レンズ」行動計画

この文書で示した「ESD レンズ」の紹介と方向性、レビュークエスチョンを使用する

「ESD レンズ」行動計画

この「ESD レンズ」行動計画は、各「ESD レンズ」レビューツールから導き出された行動計画を統合します。これは目的設定の際に役に立つでしょう。

ESD の文脈付けと理解	それぞれの「ESD レンズ」レビュープロセスで得られた 3 つから 5 つの行動計画を列挙	それはいつまでに達成されるべきか。だれが担当するべきか。
国の「ESD レンズ」レビュープロセスは計画されたか（「ESD レンズ」レビューツール 1）。		
何を ESD と関わらせるのかという点についての共通理解があるか（「ESD レンズ」レビューツール 2）。		

「ESD レンズ」による政策レビュー	それぞれの「ESD レンズ」レビュープロセスで得られた 3 つから 5 つの行動計画を列挙	それはいつまでに達成されるべきか。だれが担当するべきか。
ESD と国の開発政策との関連は明確に理解されているか（「ESD レンズ」レビューツール 3）。		
ESD は教育の目的を適切に反映しているか（「ESD レンズ」レビューツール 4）。		
ESD は国の教育政策を適切に反映しているか（「ESD レンズ」レビューツール 5）。		

「ESD レンズ」による学習成果のレビュー	それぞれの「ESD レンズ」レビュープロセスで得られた 3 つから 5 つの行動計画を列挙	それはいつまでに達成されるべきか。だれが担当するべきか。
ESD は質の教育のさらなる成果にいかに貢献することができるか（「ESD レンズ」レビューツール 6）。		
ESD は教育における質に対する既存の関心をいかに支援しうるか（「ESD レンズ」レビューツール 7）。		

「ESD レンズ」による実践のレビュー	それぞれの「ESD レンズ」レビュープロセスで得られた 3 つから 5 つの行動計画を列挙	それはいつまでに達成されるべきか。だれが担当するべきか。
ESD は変容的学習を促進するための新しい教授・学習戦略にいかに貢献できるか（「ESD レンズ」レビューツール 8）。		
ESD の、教科のカリキュラムや学習領域へのさらなる統合はいかにして可能となるか（「ESD レンズ」レビューツール 9）。		
ESD の考え方は、学習教材の開発と利用にどのように統合することができるか（「ESD レンズ」レビューツール 10）。		
ESD の、評価の実践へのさらなる統合はいかにして可能になるか（「ESD レンズ」レビューツール 11）。		
ESD はさらなる持続可能な学校づくりをいかに支援できるか（「ESD レンズ」レビューツール 12）。		
ESD の、教師教育へのさらなる統合はいかにして可能になるか（「ESD レンズ」レビューツール 13）。		

「ESD レンズ」行動計画に追加可能な他の側面

- この行動計画を進めるためにどのような資源が必要か。行動計画は既存の資源やレビューの構造・サイクルにいかにして統合することができるか。
- 次回の「ESD レンズ」レビューはいつ行われるのか、またそれを国による次のカリキュラム・サイクルや教育評価に対していかなる方法で報告することができるか。
- この「ESD レンズ」レビュープロセスはどのように拡張することができるか。
- この「ESD レンズ」レビュープロセスはどこに報告できるか（例：「万人のための教育（EFA）」レポートのような教育に関する報告書のプロセスに含める、持続可能な開発委員会に対する政府のレポートのような国の開発報告に含める、または持続可能な開発に関する国家戦略に含める）。
- ESD の評価と行動計画を促進することのできる国そして／または地方のレベルで ESD に対する既存の体系を評価したいというニーズがあるか。

ESD に関する重要な資料

UNESCO の資料

UNESCO (2002). *Education for Sustainability. From Rio to Johannesburg: Lessons Learnt from a Decade of Commitment*. Report presented at the Johannesburg World Summit for Sustainable Development, UNESCO, Paris. [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0012/001271/127100e.pdf].

UNESCO (2005). *International Implementation Scheme for the UN Decade of Education for Sustainable Development*. [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001403/140372e.pdf].

UNESCO (2005). *UN Decade of Education for Sustainable Development: Links between the Global Initiatives in Education*, UNESCO, Paris. [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001408/140848m.pdf].

UNESCO (2005). *Guidelines and Recommendations for Reorienting Teacher Education to Address Sustainability*, UNESCO, Paris. [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001433/143370E.pdf].

UNESCO (2005). *Teaching and Learning for a Sustainable Future*, UNESCO, Paris. (CD-ROM and website [Available at http://www.unesco.org/education/tlsf].

UNESCO World Conference on Education for Sustainable Development: Bonn Declaration, [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0018/001887/188799e.pdf].

DESD の地域別方針

Regional Strategy of Education for sustainable Development for Sub-Saharan Africa (SSAESD). [Available at http://www.dakar.unesco.org/news/pdf07/observatory_strat.pdf].

Regional guiding framework of education for sustainable development in the Arab Region. [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0016/001619/161944m.pdf].

Estrategia Latinoamericana para la Decada de Educacion para el Desarrollo Sostenible. [Available at http://www.oei.es/decada/portadas/estrategiaregional.htm].

Asia-Pacific.Regional Strategy. [Available at http://www.unescobkk.org/fileadmin/user_upload/esd/documents/esd_publications/working-paper.pdf].

Pacific Education for Sustainable Development Framework. [Available at http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001476/147621E.pdf].

United Nations Economic Commission for Europe (UNECE) (2005). *UNECE Strategy For Education For Sustainable Development*. CEP/AC.13/2005/3/. [Available at http://www.unece.org/env/documents/2005/cep/ac.13/cep.ac.13.2005.3.rev.1.e.pd].

その他の資料

Adams, W. (2006). *The Future of Sustainability: Re-thinking Environment and Development in the Twenty-first Century*, IUCN, Gland. [Available at http://cmsdata.iucn.org/downloads/iucn_future_of_sustanability.pdf].

Cohen, J., James, S. and Blewitt, J. (2002). *Learning to Last: Skills, Sustainability and Strategy*, Learning and Skills Development Agency, London. [Available at https://crm.lsnlearning.org.uk/user/order.aspx?code=021168&src=XOWEB].

Curriculum Corporation and Australian Government Department of the Environment and Heritage, Australia (2005). *Educating for a Sustainable Future: A National Environmental Education Statement for Australian Schools*. [Available at http://www.environment.gov.au/education/publications/pubs/sustainable-future.pdf].

Earth Charter Commission (2000). *The Earth Charter*. [Available at http://www.earthcharterinaction.org/invent/images/uploads/echarter_english.pdf].

Government of Canada (2002). *A Framework for Environmental Learning and Sustainability in Canada*, Government of Canada, Ottawa. [Available at https://www.ec.gc.ca/education/44E5E9BB-53D2-4A44-9822-E3CF32CE5E12/ECELS-E.pdf].

Henderson, K and Tilbury, D. (2004). *Whole-School Approaches to Sustainability: An International Review of Sustainable School Programs*, Australian Government Department of the Environment and Heritage and Australian Research Institute in Education for Sustainability. [Available at http://www.aries.mq.edu.au/pdf/international_review.pdf].

Hesselink, F., Van Kempen, P. and Wals, A. (2000). *ESDebate: International Debate on Education and Sustainable Development*, IUCN CEC, Gland. [Available at http://www.hect.nl/publications/ESDebate2.pdf].

Hren, B. and Birney, A. (nd) *Pathways: A Development Framework for School Sustainability*, WWF (UK) Godalming, Surrey. [Available at http://assets.wwf.org.uk/downloads/pathways.pdf].

Manitoba Education and Training (2000). *Education for a Sustainable Future: A Resource for Curriculum Developers, Teachers, and Administrators*, Manitoba Education and Training, School Programs Division, Winnipeg. [Available at http://www.edu.gov.mb.ca/k12/docs/support/future/sustaineducation.pdf].

ユネスコは、ESD に関する指導、トレーニング、学習の可能性と、教材を増やすために、一連の「ESD ラーニング＆トレーニングツール」を開発しました。このシリーズは、ESD アクションを実行するための実践的なツールに加えて、「持続可能性へのアプローチ」が持つ利点のより深い理解と、それに教育がどのように貢献することができるのかということを、政府、コミュニティや個人に提供します。

「ESD レンズ」は、ESD の観点から教育政策と教育実践を振り返り、改善するための指南書です。このツールは、公的な基礎教育制度に対する既存の教育政策や戦略を短時間で見直すにあたり、加盟国や利害関係者を支援すること、あるいは課題を特定し、それに取り組むための助言を提供することを目指しています。またこのツールは、ESD の観点から教育計画、戦略やプログラムを評価するために行われるステップのチェックリストも提供しています。